

学位論文

在ブラジル日本人の異文化適応に関する探索的研究

平成31年 3月

迫 こゆり

岡山大学大学院
社会文化科学研究科

目次

目次	1P
第1章 序論	
第1節 研究の背景と問題の所在	4P
1.1 在外日本人の増加とブラジルへの注目	4P
1.2 ブラジルの特徴	4P
第2節 先行研究の概観と研究課題の展望	5P
2.1 在ブラジル日本人および諸外国の文化変容と異文化適応研究	5P
2.2 ブラジル滞在時の困難と精神的健康	6P
2.3 困難対処とソーシャルスキル	9P
2.4 ニューカマー日本人と日系人との関係性	10P
第3節 本稿の目的と構成	11P
第2章 文化変容態度とうつ傾向との関係	
第1節 研究の背景と目的	14P
第2節 方法	14P
2.1 調査協力者	14P
2.2 調査地	15P
2.3 調査の手続き	15P
2.4 質問紙の構成	15P
第3節 結果	16P
3.1 文化変容の因子分析	16P
3.2 うつ傾向の因子分析	17P
3.3 志向性とうつ傾向の相関	18P
3.4 文化変容タイプごとの分布と属性情報	18P
3.5 うつ傾向と文化変容態度の関係	19P
第4節 考察	20P
第3章 ブラジル留学における困難とその対処	
第1節 研究の背景と目的	22P
第2節 方法	23P
2.1 調査協力者	23P
2.2 調査地	24P

2.3 調査の手続き	24P
第3節 結果と考察	26p
3.1 調査協力者ごとの分析結果	26p
3.1.1 Aさん	26p
3.1.2 Bさん	27p
3.1.3 Cさん	28p
3.1.4 Dさん	28p
3.1.5 Eさん	29p
3.2 在伯日本人留学生の困難体験とその対処	30p
3.2.1 困難を感じた体験	31p
3.2.2 対処の試み	32p
3.3 社会環境と異文化適応支援への示唆	32p
3.3.1 日系人	32p
3.3.2 治安	33p
3.3.3 ホストの気質	33p
3.3.4 ポルトガル語	33p
第4節 総合考察	34p

第4章 異文化滞在時の困難対処とソーシャルスキルの検討

第1節 研究の背景と目的	35p
第2節 方法	36p
2.1 調査協力者	36p
2.2 調査地	37p
2.3 調査の手続き	37p
第3節 結果と考察	37p
3.1 ストーリーライン	38p
3.1.1 【治安・安全】	38p
3.1.2 【社会的相違】	38p
3.1.3 【言語的困難】	38p
3.1.4 【ホストとの関わり】	40p
3.1.5 【同胞との関わり】	40p
3.1.6 【国際結婚】	40p
3.1.7 【異文化での子育て】	40p
第4節 総合考察	40p
4.1 異文化間ソーシャルスキル	40p

4.1.1	社会生活スキル	42p
4.1.2	対人スキル	43p
4.1.3	子育てスキル	44p
4.2	ストレスに対する対処としての検討	44p
4.3	ブラジルにおける異文化間ソーシャルスキル学習の可能性	45p

第5章 日系人との両価的關係性

第1節	研究の背景と目的	47p
1.1	研究上の問い	47p
第2節	方法	48p
2.1	調査協力者	48p
2.2	調査地	49p
2.3	調査の手続き	49p
第3節	結果と考察	49p
3.1	ストーリーライン	49p
3.2	日系人のとらえ方の変動	52p
3.3	日系人の異文化性と日本性	52p
第4節	総合考察	53p

第6章 結論

第1節	本研究で得られた知見のまとめ	56p
第2節	本研究の限界と今後の課題	58p

引用文献	60p
------	-----

付表	64p
----	-----

第1章

序論

第1節 研究の背景と問題の所在

1.1 在外日本人の増加とブラジルへの注目

日本国外に在留する邦人の数は増加の一途にある。2017年10月現在の外務省領事局政策課(2018)の集計では、在外邦人数は135万1970人で、そのほぼ8割が北米、アジア、西欧の3地域に滞在している。一方増加率は上記3地域以外の東欧・旧ソ連や大洋州などの地域に著しい。日本人の滞在地は多様化が進んでいるといえよう。しかし、日本の異文化適応研究のフィールドは上位3地域に滞在する者の研究が中心であり、今後はより多様な地域での研究の展開が求められる。

ブラジルの在外邦人の数は、世界で7番目に多く、南米では最多である。日本人移民の高齢化・逝去に伴い永住者数は減少しているが、民間企業関係者や留学生などの長期滞在者は増加傾向にある。具体的に示せば、長期滞在者は2013年(3,537人)から2017年(3,936人)の5年間で約400人増加しており、ブラジルの日系企業数は2017年までの過去5年間、国別ランキング14~18位を推移している(外務省領事局政策課, 2018)。その数は着実に増加しており、経済的にも日本にとって関心が高い国といえる。なお本稿でいう長期滞在者とは、外務省領事局政策課(2018)にならひ、滞在3ヶ月以上で帰国予定のある在留邦人と定義する。世界各国へ留学する日本人の総数は、近年減少傾向にあるが、ブラジルへは2014年の留学者数606人から、2015年は759人と増加しており、増加率は25.2%である。(文部科学省,2018)。学生らにとって関心が高まりつつある国の一つと考えることができ、注目に値する。このように日本人の渡伯者増加が予想される昨今、ブラジルにおいて調査研究を行うことは有益なことと考える。

1.2 ブラジルの特徴

多くの日本人にとって南米のブラジルは、欧米やアジア諸国と比べると馴染みが薄いと思われる。広大な国土と、カーニバルやサンバに象徴される陽気で開放的な国というイメージはあっても、総じてブラジルに関する情報量は少ない。日本人が渡航後に初めて知るブラジル事情も少なくないだろう。日本からブラジルまでの移動は、空路を乗り継いで一日半ほどを要する。地球儀では日本のほぼ真裏がブラジルで、その距離は遠大である。その他の特徴としてブラジルの治安は日本と比べて不安定といえる。外務省海外安全ホームページ(2018a)によると、ブラジルは危険度レベル1、すなわち危険を避けるために、その地域への渡航、滞在時は十分注意が必要、とされる地域が各所にある。犯罪発生場面に遭遇したり巻き込まれたりする可能性があるため、人々は街歩きの服装や振る舞い方など、社会生活上の用心が常に必要となる。街中では、英語がほとんど通じないため、公用語のポルトガル語ができないとホストとの意思疎通は難しい。

ブラジルは、歴史的に多くの国から移民を受け入れてきた。現在の民族比の概数は、欧州系 48%、アフリカ系 8%、混血 43%、東洋系 1.1%、先住民 0.4%の多民族国家である（外務省, 2018）。100 年以上前にさかのぼる日本人の南米移民は広く知られており、歴史的にこの地域と日本は深いつながりがある。海外日系人協会（2017）の資料によれば、ブラジルに住む日本人永住者と彼らの子孫で構成される日系ブラジル（以下、日系）人の数は、190 万人と推定されており、海外で最多の日系人が生活している。日系人が多い地域では、日本人たちも外見的には日系人に紛れるため、一見目立たない。こうした環境がニューカマーの日本人にどう受け止められ、あるいはブラジルという異文化への適応を左右するのかは、いまだに研究が及んでいない。なお、異文化の適応とは、文化間の移動と環境移行現象であり、本人の認知の再構成と行動の変容が求められる事態である（田中, 2000）。このような事態における認知と行動の変容および心理的影響を検討することを、本稿では異文化適応研究と定義する。

第 2 節 先行研究の概観と研究課題の展望

2.1 在ブラジル日本人および諸外国の文化変容と異文化適応研究

在ブラジル（以下、在伯）日本人に関する英語または日本語の心理学研究はごくわずかである。在伯日本人の異文化適応についての知見も少ない。しかし文化変容の視点から、精神的健康や心理的適応に言及している研究はある。それを紹介する前に、まず文化変容について述べておく。

文化変容とは、2 つ以上の文化グループ、そしてメンバーとの接触の結果として起こる文化的、心理的变化であり、行動の変容をともなう（Berry, 2005）。文化変容に関わる研究は、諸外国では広く行われており、移民の文化変容と心理学的適応に関する広範な文献がある。Sam & Berry（1995）の研究は、移民の適応における文化変容の役割の調査として広く知られている。彼らは、文化変容の二次元モデルを紹介したとことでも知られている。このモデルは、母文化であるエスニックや、ホスト文化に対する個人の志向性を考慮している。そしてこの二つの次元を組み込んだ二次元モデルは、ホストとエスニックの方向の中央値を基礎として、調査対象者を 4 つのタイプの文化的な態度（分離、統合、同化、周辺化）に分けている。分離タイプは同胞との関わりやエスニック性を好み、ホスト文化の価値観や規律に同調しない。統合タイプは、ホスト文化や社会的習慣を持ちつつ同時にエスニック性を残す。同化タイプは民族的規律や価値観を残さず、ホスト社会のメンバーに加わる。周辺化グループは、ホスト国の主流社会又は民族グループ両方に関与しない、と文化変容態度の 4 つのタイプを説明している。この研究手法によるこれまでの研究（Ward & Rana-Deuba, 1999; Jang, Kim, Chiriboga, King-Kallimanis, 2007; Ward & Kenny, 1994; Ting-Toomey, Yee-jung, Shapiro, Garcia, Wright & Oetzel, 2000; Berry & Sabatier 2010）では、文化変容と、精神的健康や心理的適応などの関連が検証されており、すべて統合タイプの

個人が、より精神的健康が保たれ、適応しやすいことが示されている。

また、北米在住の日本人女性永住者を対象に、文化変容のプロセスに視点を置いた異文化適応研究もある（出口,2010; 志賀,2014）。そこでは、女性たちの適応に、ホスト社会を肯定的に受け止める、母国の文化を取り入れるという両文化に対する自身の考え方や態度が影響を与えたとしている。日本人対象の研究においても、文化変容と異文化適応の関連が注目されている。

在伯日本人対象の研究に立ち戻り、広く文化変容の視点を取り入れた議論を探してみると、心理学ではないが文化人類学者の斉藤（1984）、前山（2001）が、日本人移民や子孫である日系人にとってのアイデンティティや文化変容について議論している。そこでは日系2、3、4世と世代が進むにしたがって、ホスト文化が優勢になっていくことを指摘しているが、精神的健康の関係については、母文化やホスト文化の統合を有利とみる、今日の心理学的な見方を支持する知見がみられる。また、やや古典的な心理学研究ではあるが、棚原（1980）は在伯沖縄系移民の考え方や性格・属性、社会的態度特性、精神健康度との関連を質問紙調査で調べている。ブラジルにうまく適応するタイプは、ホスト社会に溶け込む外向性と同族同士集合しようとする収束性の両機能を持ち合わせている、つまりホストと同胞両方と関わりが持てるタイプとしている。最近の研究では迫（2015）が、ブラジルに永住予定の21人の在伯日本人に対して半構造化面接を行っている。母文化を保有しながらブラジル文化をバランスよく取り入れている、両文化を保持する人が、精神的に安定して適応が進むとしており、棚原（1980）、斉藤（1984）や前山（2001）らを支持する結果となっている。しかし棚原（1980）や迫（2015）の研究は、永住予定の日本人が対象であり、同様のことが帰国予定のある日本人にも言えるのかどうかは未詳である。長期滞在の在伯日本人の増加にともない、今後は彼らを含めた研究が必要となるだろう。

そもそも日本を離れて海外生活をするということは、慣れない暮らしゆえに精神的ストレスが高い。新しい生活に適応していかなければ健康を害しかねないという意味ではハイリスクの環境といえる。そのような環境において、精神的健康を維持し、適応するために必要な文化変容態度はどのようなものかを知ることは異文化適応研究における重要な視点と考えられ、その検証が待たれる。

2.2 ブラジル滞在時の困難と精神的健康

前項で述べたように、精神的にも安定して異文化適応に有利とされる統合タイプの個人は、エスニック性を保ちつつホスト社会の文化や習慣を取り入れるとしている。エスニック性は、もともと個人に内在化された文化であることから、保持することは難しいことではないと思われるが、ホストの社会文化は、馴染みがないために時には取り入れ難いと感じることがあるだろう。したがって、異文化において精神的健康を保つためには、ホストとの関わりを含む当該国の社会文化がどのように滞在者の個人に影響するのかに注目す

る必要がある。

一つのデータとして、世界各国の拠点にある日本領事館・大使館が援護をする邦人の数をみると、2016年までの過去5年間、毎年17,000～18,600人程度と報告されており、うち1～2%にあたる200～300名が毎年心の健康問題で保護されている（外務省海外安全ホームページ2018b）。しかし報告される数は氷山の一角に過ぎないと、医師の立場から在外邦人のメンタルヘルスを研究している鈴木（2012）は指摘する。在外邦人の増加と共に、精神保健対策はますます重要になるだろう。稲村（1980）、大西（1992）は、会社員の夫と帯同の妻、留学生など多様な滞在理由の人たちが海外で精神的健康の不調をきたした症例を紹介している。それらは個々の性格など内的要因のほか、言葉や習慣の違い、滞在先の環境など様々な外的要因によって、高ストレスの状況下に置かれたためである。Shibuya（2000）や Ozeki & Mizuguchi（2007）らは、海外赴任者の妻の異文化接触に関する研究において、妻達が、慣れない言語や生活環境下で家や子どもの世話などの責任を任され、それが大きなストレスとなると報告している。滞在先の言葉や生活環境が日本とは異なる場合は、ストレスが生じ易い。

ブラジルをフィールドとした日本人以外の在伯外国人の心理学研究からは、ブラジルの社会環境の影響が見られる。Silva, Neto, & Skokauskas（2013）は、各国から避難民としてブラジルに移住した家族の子どもや青年の精神的健康と、ブラジルの治安や言語社会的な問題の関連を展望して、こうした社会状況の否定的影響を指摘している。Sam, Denise, Mari, & Shirakawa（2009）は、母国の韓国人と在伯韓国人の精神健康度を比較したところ、母国の韓国人（32.6%）と比べて在伯韓国人（41.9%）の精神疾患率が高かったと報告している。これらはブラジル社会における治安の不安定さが、精神的健康を損なわせる可能性を示している。

精神的健康を損なう外的要因としては、滞在先の社会的環境のほかに、母国との距離への言及がある。Demes & Geeraert（2014）は、海外生活の体験があるアフリカやアジア、ヨーロッパ、北アメリカ諸国の国民1929人対象に、その体験に関する調査を行った。すると母国とホスト国との距離の長短は、幸福感や異文化適応の高低と負の相関を示した。ブラジルは日本からみて地球儀の真裏に位置しており、日本から最も距離が遠い国の一つである。だとすれば、日本人がブラジル生活に適応をするため多くの困難に出会っても不思議ではない。日本でブラジルに関する情報が比較的得られにくいとすれば、渡伯して初めて現地の社会状況を知ることもし少くないと予想できる。ホスト国の社会文化に接して困難を感じ、その克服が容易でない場合、精神的負担が増すと考える。

このような母国の社会文化的環境との相違を経験して、精神的健康が低下した状態を概念化したのが Oberg（1960）である。彼は、母国と異なる文化に滞在して「社会的に慣れ親しんだシンボルやサインを失うことによって突然生じる不安な精神の状態」（p.177）をカルチャー・ショックと定義した。ブラジル滞在は、馴染みが薄い環境に暮らすという意

味では、日本人にとってカルチャー・ショックの高リスクな環境といえる。しかし、カルチャー・ショックをポジティブにとらえる考え方もある。Adler (1975) , Pedersen (1995) らは、新しい文化の学習と個人の人間的成長の場にとらえる見方をしている。カルチャー・ショックが学びの過程であるならば、それは対処を工夫し、克服して異文化適応する過程ともいえよう。価値観の違いによって、ホストとの付き合いに困難を感じたとき、共有できる考え方を見つけて折り合いをつけ、問題の解決を図るプロセスに習熟できたなら、人間的成長につながるかもしれない。

克服の方法は、迫 (2015) による、永住予定の在伯日本人 18 人における半構造化面接調査の結果が、その手掛かりになろう。そこでは、「異文化に合わせた行動」、「適応するための積極的な努力」、「日本の環境の保持」をするという行動的対処、および早く馴染もうと焦らないで「考え方のコントロールをする」という認知的対処が、精神的に安定し、ホスト国への適応が進むとされた。ただしこれは調査の対象が永住予定者であったため、帰国予定のある滞在者に同じことが言えるかどうかはわかっていない。これまでの数少ない研究からは、精神的健康を保ち、ブラジルに適応を果たすために、意識的な対処が求められていることは理解されても、その具体的な内容を明らかにするには至っていない。

近年ブラジルには、海外赴任や現地での就労を目的とした、長期滞在者の日本人が増加している。さらに、ブラジル経済を学ぶなど留学目的による、日本人学生の増加も目覚ましい。今後は永住予定者のみならず、長期滞在者を含めた在留邦人の、ブラジル滞在における具体的な困難の内容と、その有効な対処方略の検討が望まれる。

特に留学生は、就労目的の会社員やその家族らに比べると滞在期間が短い。文部科学省 (2018) によると、日本人留学生の留学期間は近年短期型が増加しており、2016 年に世界各国に留学した全日本人学生 96,641 人のうち、留学期間 1 年以上の者は、わずか 2.5% (2,456 人) と報告している。同年のブラジル留学者の総数は 759 人だが、その約 8 割 (597 人) が 3 ヶ月未満の短期滞在である。在伯日本人留学生の多くは滞在期間が一年未満と考えたほうが良いだろう。留学生が、その目的を達成するためには、より速やかにホスト国に適応し、落ち着いて勉強に取り組む環境を整えることが望まれるため、特に焦点を当てて検討する必要があるだろう。

また、留学生以外の在伯長期滞在者を対象として、彼らがブラジル滞時に感じる困難とその対処法を把握し、検討することも、当事者や彼らを送り出す側が行う教育的サポートの充実のためにも有用な研究と思われる。社会人の長期滞在者の滞在理由は、国際結婚や就労、就労者の帯同家族としてなどさまざまである。その滞在理由によって、ブラジル生活の中で感じる困難の場面や質が異なり、その対処の仕方も多岐に及ぶと予想される。多様な滞在理由を持つ長期滞在者を対象に含めて滞時の困難とその対処を検討することで、多くの日本人に適用可能な困難対処の方法を得ることも期待できる。また、一年足らずの滞在と比べ、数年数十年と滞在をする長期滞在者は、より長く滞在することによっ

て、対処法もより洗練されているかもしれない。より多様な調査対象者から詳細な情報の収集とその検証が望まれる。

2.3 困難対処とソーシャルスキル

ブラジル生活における困難とその対処について詳細な情報収集・検証を行うことは、それ自体有用な研究であるが、本稿ではさらにその活用を考えたい。把握した困難対処を基にブラジル滞在時に役に立つソーシャルスキルを産出することが出来たら、今後渡伯する日本人にとって貴重な情報となる。これにより本研究は、企業や大学など渡航する人を送り出す側が行う、教育的サポートの手がかりを提供するという意義を持つといえよう。

ソーシャルスキルは、臨床心理の分野では対人的なスキルを中心としてきたが、社会心理学的な質的研究の中には、社会生活面でうまく暮らしていくためのスキルもソーシャルスキルに含む考え方がある。異文化適応研究においては、対人面、社会生活面ともに新しい環境に移動した個人を対象とすることから、双方の視点を持つ必要があると考える。

社会生活面に注目した Furnham & Bochner (1986) は、病院のかかり方や現地の公共交通機関の乗り方の違いなど、海外生活における社会システムの差異で発生する社会的困難について調べた。そして、それらは滞在者の性格に起因するものではなく、適切なソーシャルスキルすなわちホスト国における社会的な技能の欠如に起因すると解釈している。ブラジルにおける日本人以外の在伯外国人を対象にした先行研究 (Silva et al, 2013 ; Sam et al, 2009) によると、当該国では、不安定な治安や言語社会的な問題が、精神的健康を損なわせることが示唆されている。このような問題は、在伯日本人にとっても困難となる可能性がある。うまく対処が出来なければ精神的健康を損なうかもしれない。社会生活におけるスキルは、異文化生活において重要な意味を持つといえよう。

また、対人面に関しては、田中 (2010) が、異文化滞在におけるホストとの円満な対人関係の有用性について述べている。そして異文化圏での人付き合いに役立つ認知や行動を抽出し、異文化間ソーシャルスキル学習として対人面の社会的行動学習を試みている。異文化滞在者の対人関係には、ホストをはじめとする異文化性を持つ人々のほか、同胞との対人関係が存在する。同胞との対人関係について稲村 (1980) は、異文化の中では同族同士一体化しようとし、それに従わない者を村八分にする場合もあると述べ、関係の否定的側面に注意を促している。鈴木 (2012) も、異文化での小さな邦人社会を「逃げ場のない濃厚な人間関係」(p.7) と形容して、異文化の中での同胞との付き合いの特殊性を指摘している。その一方で、叶 (2015) は、海外赴任者の妻達が、パーソナル・ネットワークを利用して同胞からの支援を受けていたという肯定的側面を報告している。対人的スキルを用いて先住の同胞と良好な関係を保つことが出来れば、慣れない異文化生活において役に立つ情報や支援を、母語で受けることもできるだろう。異文化ではホストらと共に、同胞との対人関係を円満に構築するスキルも、安定的な異文化滞在のためには有用と考える。

社会生活面と対人面双方におけるブラジルの異文化間ソーシャルスキル構築が待たれる。

なおブラジルには、多くの日系人が存在する。日本人を祖先に持ち、外見的特徴や言語・文化に共通性を持つ彼らは、日本人にとって同族的な親しみやすい存在と思われるが、日系人が同胞と同じような役割を果たすのかどうかは分からない。現在 190 万人と推定される日系人が生活するブラジルにおいて（海外日系人協会, 2017）、対人環境として彼らの存在が在伯日本人に与える影響について注目することは、意義があると考えられる。次項では、日本人と日系人との関係性について詳しく述べていきたい。

2.4 ニューカマー日本人と日系人との関係性

世界最大規模の日系人の数を擁すると言われるブラジルであるが、ブラジルの日系人の歴史は、1908 年、日本政府の移民政策による日本人のブラジル移民から始まった。以来第二次世界大戦による一時中断をはさむが、1981 年まで実に 60 年以上にわたって日本人のブラジル向けの移民は継続された。その数は 244,950 人で、ラテンアメリカ向け日本移民総数の 78% を占めている。ブラジルにおける日本移民の定着率は 90% とされ（日本移民学会, 2018）、現在も日本人とその子孫の日系人で構成される日系コロニア（日系人コミュニティ）がブラジル各所に存在している。ブラジルの在留邦人数は 2017 年 10 月現在 5 万 2,426 人で、最多時（1975; 14 万 6,488 人）の 36% 程度となっている（外務省領事局政策課, 2018）。長期滞在者が増加しているにも拘らず、このように在留邦人の全体数が減少しているのは、かつての日本人移民が高齢化、逝去しているためである。

そもそも日系人とは、どのような人のことを言うのか、先ほどは「日本人とその子孫」と簡単に述べたが、実際には細部において異なる定義が存在する。以下にいくつか紹介しておく。外務省の海外在留邦人数統計調査においては、日系人と日本人を明確に区別する記述がない。海外日系人協会（2017）では「永住の目的を持って、生活している日本人並びにその子孫の二世、三世、四世などで、国籍や混血は問わない」としている。人類学研究や、社会学の移民研究においても、多様な解釈がある。前山（2001）は、一般流通の語法とは関係がないとしながら、日系人とは「日本生まれの、日本国籍を持つ、ブラジル定住日本人と、ブラジル生まれの、ブラジル国籍の日系ブラジル人、帰化日系ブラジル人も含める」と述べている。また、加藤（2016）は、第二次世界大戦後の移民となった人を新一世として、それ以前の移民（日系人）と区分する方法を紹介している。これは、戦前の移民が農業目的の移民であったのに対し、戦後は工業技術や産業開発目的の移民へとその質が転換したため（森, 2008）、区別する必要があったと考えられる。このように、日系人の定義は、移民の時期によって区別する、国籍や永住目的の有無を条件にする、など細部においてさまざまな考え方があり得る。しかし日本以外の一定地域に定住している日本人および、定住している日本人の子孫達をさすと考えて間違いはないだろう。

日系人を対象とした研究は、社会学や人類学研究でも見られるが、心理学的研究では、

彼らのアイデンティティに注目した言及がある。角川（1993）は、日本に留学したラテンアメリカ諸国の日系二世、三世の心理的傾向とパーソナリティについて調査をしたところ、日本滞在の経験により、もともと彼らの中で内在されていた自分は日本人か、ラテンアメリカ人かというアイデンティティの葛藤がさらに増幅されたと報告している。純粋な日本人の両親や祖父母と異なり、彼らは、日本と彼らの生まれた国という、二つのアイデンティティのはざまでゆらぎが生じている。また、人類学者の前山（2001）は、ブラジルの日系二世、三世らが、「ニホンジン」という言葉と、ポルトガル語の日本人という意味を表す「ジャポネーズ」を区別して用いるという例を紹介している。そして「ニホンジン」が二世、三世自身のアイデンティティであり、「ジャポネーズ（日本人）」ではないと主張する若者が多い。その一方で全くそのような区別をしないと答えるものも多いとしている。彼らのアイデンティティのとらえ方には、世代差、個人差があることが理解できる。

迫（2015）は、ブラジル永住予定の在伯日本人にとって、日系人が言語や文化の共通性を持った人々として受け止められ、そこに安心感や親しみを覚えていること、社会文化的な支援源として重視されていることを報告している。日系人は現地の言葉や流儀にも精通しているので、かなり行き届いた支援者と思われる。しかしながらその中には日系文化を異文化とみて、日系人との付き合いがストレスになると語るケースもあった。だがどうしたらうまく付き合っていけるのかは、未解明である。

鈴木（2012）は北南米と、欧州アジアの邦人社会を比較し、前者には日系人社会が培ってきた生活全般にわたる相互扶助の歴史があり、それが邦人への支援機能につながっていると述べている。しかし支援機能という表現は出てくるが、それはどのようなものなのか具体的には示されていない。在外邦人と、ホストや同胞との対人関係に言及した研究はあるが、日系人との対人関係に焦点をあてた心理学研究はブラジル以外でも見当たらない。日系人に、支援源とストレス源の両価性があるとみるなら、まず在伯日本人にとってどのような存在なのか、そしてどう接したら肯定的な関係を築けるのか、そして両価性の背景にある機序はどうなっているのか。そこを読み解くことが期待される。

第3節 本稿の目的と構成

本稿の目的は、在伯日本人の異文化適応に関する探索的研究を行うことである。在伯日本人を対象とした先行研究が少ないことから、様々な角度から見ていきたい。まず、慣れない海外生活は精神的なストレスを受けやすく、精神的健康の維持が困難になることから、精神的健康を維持したブラジル適応について、文化変容の視点から探索する。ホストとエスニックの両文化への志向性と、精神的健康の指標のひとつである、うつとの関係性から望ましい文化変容態度を検証したい。諸外国においては、文化変容の二次元モデルを使用した精神的健康に関する研究蓄積が厚い。在伯日本人に対しても同じモデルを使って、文化変容態度とうつ傾向の関係について量的手法による調査を行い、いわば定番

知見の検討を行う。また、移民に関連した異文化移動の心理的变化において、うつ傾向は異文化間移動者にありがちな結果という報告（Dinesh & Oyedeji,2004）がある。本研究では精神的健康の維持に注目しているため、その低下を示す指標としてうつ尺度を用いる。

文化変容の視点による示唆が得られたら、その次はより詳細な検討に入る。慣れないブラジルの社会文化に接して困難を感じたとき、適切な対処ができなければ精神的な負担となる。したがって具体的にブラジル滞在においてどのようなことに困難を感じ、どのように対処をしているのかを聞き取り、検討していきたい。

さらに困難とその対処についての知見を得た後は、その活用のためにブラジル滞中に役に立つソーシャルスキルの産出を試みる。有用と思われる困難対処の中から、今後渡伯する日本人への事前教育に資する、対人を含むブラジル社会生活における行動的、認知的な異文化間ソーシャルスキルの抽出を目指す。

最後に、在伯日本人のブラジル適応において、日系人との関係性に注目する。日本人にとって支援源にもストレス源にもなるという日系人の両価性を検証し、その分岐の仕方や肯定的な関係性の構築のための示唆を得たい。

本稿の構成を Figure I - 1 に示す。

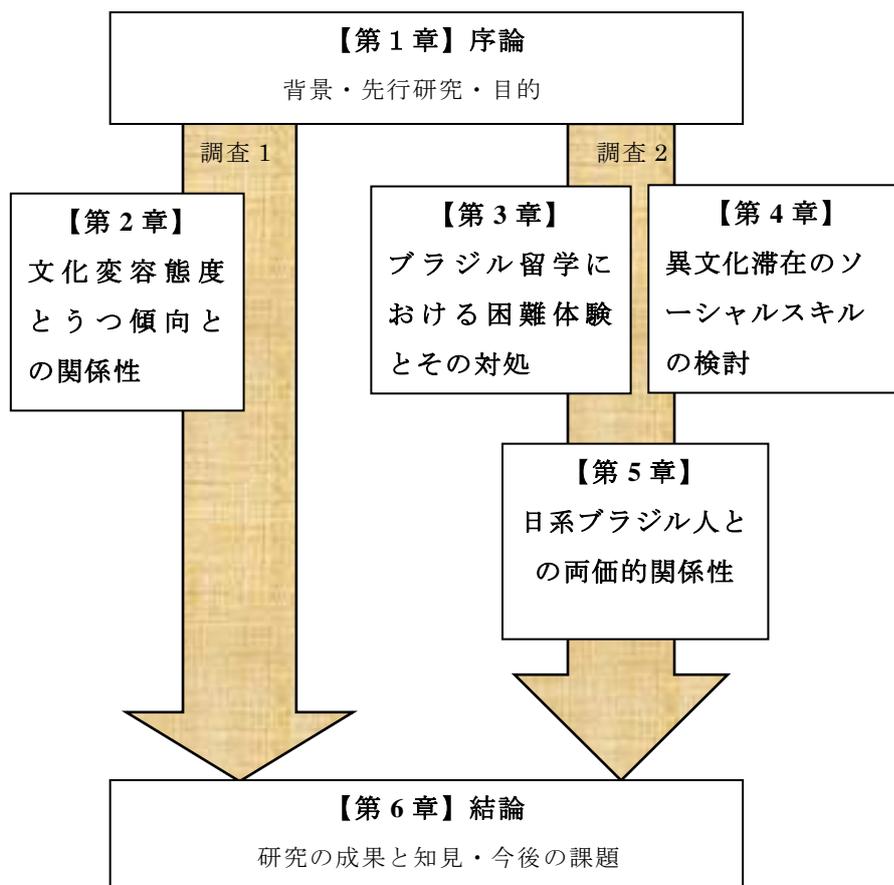


Figure I -1 研究の全体像（1）

第1章の序論では、研究の背景を示し、在伯日本人の異文化適応について、文化変容態度と精神的健康、滞在時の困難対処、異文化間ソーシャルスキルの抽出、日系人との関係性に着目する意義と問題の所在について論じた。

第2章では、在伯日本人が精神的健康を維持して異文化適応するための、望ましい文化変容態度について検討する。在伯日本人において、文化変容態度の統合タイプの個人が最も精神的健康を維持しながら適応がすすむという仮説を立て、量的手法である質問紙調査（調査1）の結果を検証する。そして得られた知見を基に論じる。

第3章以降では、より具体的な情報を得て、いくつかの観点から探索する。まず、質的手法（調査2）である半構造化面接を実施し、在伯日本人の現地生活における困難と、その対処について詳細な情報を得てその検討を行う。第3章では、在伯日本人留学生に焦点を当てる。滞在期間が短い留学生は、速やかにホスト国の生活に慣れて、学習の目的を達成するため環境を整える必要がある。異文化生活に起因する困難と、その対処として用いた認知や行動を明らかにし、示唆を得る。

第4章では、対象者を広げて在伯年数や滞在目的、社会参与の仕方などが多様な在伯日本人を対象として、同様に検討を行う。そして留学生に対する示唆を含め、ブラジル社会文化の生活に役に立つ異文化間ソーシャルスキル産出を試みる。

第5章では、日系人に関する語りに焦点を当てる。ブラジルの特徴のひとつである日系人の存在が、日本人にとって支援源にもストレス源にもなるという両価性の分岐を明確にし、肯定的な関係性を構築するための示唆を探求する。

最終章である第6章では、本稿で得られた結果を総括する。各章で得られた知見を簡潔に振り返り、最後に本研究の限界と今後の課題および展望を述べる。

第2章 文化変容態度とうつ傾向との関係

第1節 研究の背景と目的

永住予定の在伯日本人を対象とした異文化適応研究において、棚原（1980）、迫（2015）らは、母文化を保有しながらブラジル文化をバランスよく取り入れている、両文化を保持する人が、精神的に安定して適応が進むと述べている。しかし調査対象が永住予定の日本人に限られており、帰国予定のある日本人にも同じことが言えるかどうかは未詳である。長期滞在日本人が増加の一途にある現在、ブラジルの異文化適応研究は、調査対象者を広げ、より多角的な視点からの研究が望まれる。

異文化間移動において認知と行動の変容が求められる事態に接し、精神的健康の低下しやすい状況になることから、今回の研究では、文化変容の視点から精神的健康を維持して異文化適応するために望ましい態度を検討する。長期滞在日本人を含む在伯日本人を対象とした質問紙調査の結果を基に検証し、ブラジル適応における示唆を得るものとする。前章で述べたように、文化変容の視点は、諸外国の異文化適応研究で広く取り入れられており、先行研究と比較検討しながら考察できることから、本稿においても同じ手法を取り入れたい。精神的健康を測定する指標について、先行研究（Jang et al,2007; Ward & Kenny,1994; 李・田中,2017）では、異文化滞在者の心理的適応やメンタルヘルスを測定するために、うつや幸福感の尺度を用いている。本研究では精神的健康の維持に注目しているため、その低下を示す指標としてうつ尺度を用いる。文化変容態度は Berry（1997）の骨子を用いて、ホスト文化、およびエスニック文化の志向性の高低により調査対象者を4つのグループ（分離、統合、同化、周辺化）に分け、うつとの関連を検証する。

棚原（1980）や、迫（2015）らの研究結果からかんがみると、ブラジルでも統合タイプの個人が、うつ傾向が低いと予測される。そこで「統合タイプである母文化とホスト文化の双方の志向性が高い場合に、最もうつ傾向が低い。」という仮説を立てて検証を行い、精神的健康を維持したブラジル適応に有用な知見を得ることを試みる。

第2節 方法

2.1 調査協力者

調査協力の依頼に際して、まず日本人の定義を「両親が日本人で、日本で生まれ、成人まで日本で生活した人」とし、該当する在伯日本人のなかで、ブラジル滞在3ヶ月以上の長期滞在者に協力を依頼した。調査協力が得られたのは128人だった。このうち12人は回答の記入漏れにより有効なデータが得られないと判断したため除いた。したがって116人の協力者（男性55名、女性61名）からの回答を採用した。協力者の年齢は20～80歳以上であった。

年齢構成は次のとおりである；20代（ $n = 5$ ）、30代（ $n = 21$ ）、40代（ $n = 19$ ）、50代（ $n = 19$ ）、60代（ $n = 14$ ）、70代（ $n = 10$ ）、80代以上（ $n = 28$ ）。在伯年数の分布は以下のとおりである；1-5年（ $n = 35$ ）、6-10年（ $n = 14$ ）、11-20年（ $n = 5$ ）、21-30年（ $n = 10$ ）、31-40年（ $n = 6$ ）、41-50年（ $n = 6$ ）、51年以上（ $n = 40$ ）。永住予定者は72人（62%）、日本に帰国する予定の者は33人（28%）、11人（10%）が未定であった。

2.2 調査地

調査は、ブラジル南部の州都 X 市で、2013 年 7 月に実施した。X 市は 2014 年現在人口約 186 万 5 千人、環境と景観に配慮した清潔で緑豊かな都市である。近年治安が悪化し、外務省海外安全ホームページにおいて危険度レベル 1 と指定された（外務省海外安全ホームページ, 2018a）。同市は移民の町としても知られており、主な民族構成はイタリア・ドイツ・ポーランド・ウクライナ、アラブ系及び日系である。日系人は推定約 4 万 5 千人が居住しており（在 X 市日本国総領事館, 2015）、調査の協力が得られる日系人団体の組織が機能している。日本人居住者数も、X 市はサンパウロ市に次いで多いため、X 市で調査することを決定した。

2.3 調査の手続き

調査協力者は、2013年7月に開催された「日本祭り」のイベント会場で募集した。筆者や、日本人スタッフらが会場に来た在伯日本人にその場での協力を依頼し、その場で回答を収集した。そのほかにも、日本企業や日系グループ、宗教グループにも協力を依頼し、すべての質問紙は、6月から10月までの間に、筆者と日本人スタッフによって回収した。調査協力者の中には、日本語よりポルトガル語の方が理解しやすい人がいるかもしれないと考えて、調査依頼書は日本語とポルトガル語を用意した。アンケートは日本語でのみで提示したが、すべての漢字にカナを振るなどの配慮を行った。日系グループや宗教グループ、イベント会場での調査中には筆者または日本人スタッフが、日本語の読み取りが困難な人はいないか注意を払い、必要に応じて質問を読み上げるなどのサポートを提供した。日本企業や筆者の知人に依頼した質問紙は、自宅などで記入していただき、その後提出していただいた。

倫理的配慮としては、無記名であること、参加は自由であること、得られた回答は統計的に処理され、本研究以外の目的で使用されないこと、及びいつでも協力の中止が出来ることなどを文書にて説明した。そして調査後、協力者には文房具（一筆箋、筆ペンなど）をお礼として渡した。

2.4 質問紙の構成

ブラジルに住む日本人の中でも「日本人」「日系ブラジル人」「一世」という用語は人

によって見解が異なる。調査者と回答者の間の見解を統一するために、質問紙の冒頭に定義を行った。具体的には、本調査でいう「日本人」とは両親が日本人で、日本に生まれ育った人。「一世」は、日本で生まれ育ったが、ブラジルに移住して帰化した人。日系ブラジル人は、一世と、日本人の親または祖先を持つブラジル生まれの人とした。そして、調査協力者に対し、質問の前に性別、年齢、渡航時の年齢、居住期間、国籍、および将来の居住予定（ブラジル又は日本に居住予定）などの基本的情報を尋ねた。ホストとエスニックの質問項目は、友情、国籍、食生活、生活習慣など同じカテゴリーについて13項目を作成し、交互に質問した（例：私は親しいブラジル人の友人がいる；私は親しい日本人の友人がいる）。それぞれの項目は、5件法で得点された（1=まったくそうではない、2=あまりそうでもない、3=どちらともいえない、4=ややそうである、5=とてもそうである）。ホスト項目は、滞在国になじむことにどの程度関心を持ち、そのための行動をしているか、エスニック項目は、自国の文化や生活習慣を保持することにどの程度関心を持ち、そのための行動をしているか、の観点から尋ねた。具体的な質問は、李（2013）の在日韓国人移民における調査をもとにして、ブラジルに住む日本人向けのバージョンを作成した。精神的健康度の測定は、Sam & Berry（1995）、李（2013）らにならない、現在の生活や将来の一般的な希望や喜びを評価するうつ尺度を採用した。

第3節 結果

3.1 文化変容の因子分析

今回の調査は、日本とブラジル両方の文化の影響を受けた日本人に対して、文化変容のホストまたはエスニック志向と精神的健康の関係を測定する質問紙調査である。したがって質問の仕方も平等を期すため、食や言語・結婚・友人関係などを対カテゴリーにして交互に質問を行った。そして分析もお互いへの影響の可能性を考慮して、同時に双方の13質問項目について探索的因子分析を行った（Table II - 1）。

固有値の減衰状況やスクリープロットから、2因子構造が妥当と考え、因子数を2に固定して再度因子分析を行った（主因子法、バリマックス回転）。累積寄与率は第二因子までで33.2%になり、十分説明率があると考えた。次に因子分析を行った。第一因子は5項目が因子負荷量.35以下または両方の因子に.35以上の数値を示したため削除された。第一因子は、「ブラジル人の親友」を持ち、「自分らしくブラジル人と付き合える」と感じ、「ホスト国の政治や社会を良く知っている」という項目に高い付加量が付与されたことから、「ホスト志向」と命名した。クロンバックの α 係数は.80だった。

第二因子は9項目が同じ理由によって削除された。第二因子は「日本人、日系ブラジル人同士で積極的に交わり」、「日本人、日系ブラジル人同士の結婚に賛成」で、「日本人、日系ブラジル人の親友」がいるという項目に高い付加量が付与されたことから、「エスニック志向」とした。エスニックの質問項目の天井効果がみられた9項目のうち、削除して

も良いと思われる5項目を除いて因子分析を行った。クロンバックの α 係数は.52だった。

Table II -1 ホストとエスニック志向項目

項目	要因 1	要因 2
ブラジル人の親友がいる	.82	-.08
ブラジル人とつき合う時は、自分らしく自然にふるまえる	.70	.04
ブラジルの新聞や雑誌を通じて、ブラジルの政治や社会のことをよく知っている	.61	-.13
ブラジル人との集まりに、積極的に参加している	.57	.25
ブラジルの生活習慣になじんで暮らしている	.56	.04
自分はブラジル人とほとんど変わらないと感じる	.50	.10
ブラジルに住んでいるので、ブラジル国籍になってもいいと思う	.43	-.18
ブラジルの祝日や記念日を祝っている	.40	.20
日本人や日系ブラジル人との集まりに、積極的に参加している	.06	.63
日本人・日系ブラジル人どうしで結婚することに賛成だ	.01	.51
日本人や日系ブラジル人の親友がいる	.14	.41
日本の国籍を守り続けるのは、いいことだと思う	-.21	.39
因子寄与率	23.7%	9.5%

3.2 うつ傾向の因子分析

7つのうつ項目について、探索的因子分析（主因子法）を行った。固有値の減衰状況やスクリープロットから、一因子構造が妥当と考え、因子数を1に固定して再度因子分析を行った（Table II -2）。

Table II -2 うつ項目

項目	要因
時々、すべてに希望がないように思われ、何もやりたくない気分になる	.90
何の理由もなく悲しくなることがよくある	.78
楽しみや期待していることが何もない	.77
時々ゆううつになり（落ちこんで）一日中ふとんに入っていたい気分になる	.67
理由も分からずゆううつになる（落ちこむ）ことがよくある	.58
時々、人生は生きる価値がないものと思うことがある	.57
私の人生は、かなり、みじめである	.43
因子寄与率	53.70%

その結果、因子負荷量.35以下のものはなく、すべての項目を使用した。因子寄与率53.7%で、十分説明率があると考ええる。7項目一因子とし、気分が落ち込んで、楽しい気持ちになれない「うつ傾向」と命名した。クロンバックの α 係数は.850だった。

3.3 志向性とうつ傾向の相関

2つの志向変数およびうつ傾向についての相関をTable II -3に示す。ホスト志向とうつ傾向との間に有意な負の相関が見られた。連続変数間の関連をみるための基本情報は得られた。

Table II -3 志向性とうつ傾向との相関

	Me	SD	ホスト志向	エスニック志向	うつ傾向
ホスト志向	2.98	0.84	—		
エスニック志向	3.98	0.72		—	
うつ傾向	1.41	0.63	- .255**	- .105	—

注: ** p < .01

さらに、2要因分散分析 (ANOVA) を用いてうつ傾向におけるエスニック/ホスト志向の高低の影響を比較したところ、うつ傾向においてホスト志向の主効果が観察された ($F(1, 114) = 10.07, p < .01$)。低いホスト志向のグループが、より高いうつ傾向を有することを示した。

3.4 文化的変容タイプごとの分布と属性情報

Berry (1997) の方法に従い、調査協力者を、文化変容の二次元モデルを用いて中央値より高い(または低い)値によって4つのタイプに分けた。4つのタイプの分布図を、Figure II -2 に示す。

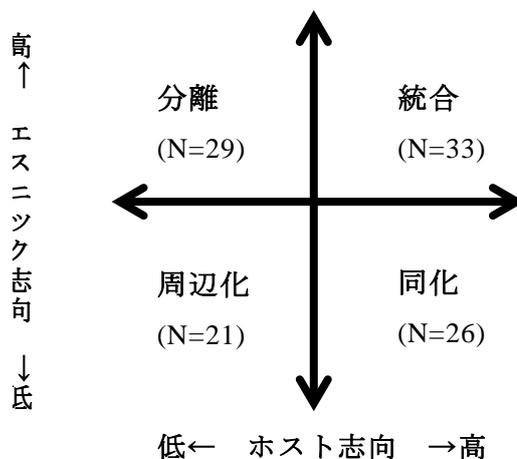


Figure II -2 文化変容タイプごとの分布図

ホストとエスニック志向の両方の傾向が低い者は、周辺化タイプ (n=21) に、高ホストと低エスニックの者は同化タイプ (n=26)、低ホスト、高エスニックの者は分離タイプ (n=29) に、ホストとエスニックのスコアがともに高い者は統合タイプ (n=33) に割り当てられた。各群人数が異なることによるバイアスを説明するために、カイ二乗検定を利用した。タイプ別人口数には差は見られなかった ($\chi^2(3) = 2.28, p > .05$)。エスニック志向の中央値は 3.98 (SD=.72) であり、これは比較的高いと言える。ホスト志向の中央値は 2.98 (SD=.84) だった。

4つのカテゴリーのそれぞれの属性情報をTable II-4 に示す。国籍によって4類型の分散に偏りがあることを除けば、変数間に有意な関係はなかった。

Table II-4 文化変容タイプごとの属性情報

	性別		将来の住まい			国籍			在伯年数		
	(N = 109)		(N = 109)			(N = 108)			(N = 109)		
	M	F	BR	JP	U	JP	BR	B	≤10	11-40	≥41
	(N=50)	(N=59)	(N=65)	(N=33)	(N=11)	(N=94)	(N=12)	(N=2)	(N=49)	(N=20)	(N=40)
同化 (N=26)	14	12	19	4	3	18	6	2	9	7	10
統合 (N=33)	16	17	21	9	3	28	5	0	12	7	14
周辺化 (N=21)	13	8	9	10	2	20	1	0	13	3	5
分離 (N=29)	7	22	16	10	3	28	0	0	15	3	11

注：M = 男性, F = 女性, BR = ブラジル, JP = 日本 U = 未決定, B = 両方

3.5 うつ傾向と文化変容態度の関係

文化変容態度を独立変数、うつ傾向を従属変数とした一要因分散分析を行った (Table II-5)。うつ傾向については、統合と周辺化、統合と分離の両方に有意差があった ($p < .05$)。有意差はないが、同化と比較しても統合のうつ傾向が低く、統合タイプの者が最も低いうつ傾向を示している ($F(3,113) = 3.97$)。

Table II-5 うつ傾向と文化変容態度の関係

	同化		統合 (1)		分離 (2)		周辺化 (3)		F	多重比較
	(n = 25)		(n = 32)		(n = 34)		(n = 25)			
	Me	SD	Me	SD	Me	SD	Me	SD		
うつ傾向	1.45	0.76	1.11*	0.24	1.58*	0.7	1.56*	0.65	3.97**	(1) < (2), (3)

注：* $p < .05$, ** $p < .01$

第4節 考察

今回の研究において、うつの主効果がホスト志向に見られた。ブラジルにおいて、ホストへの志向性が精神的健康を維持する上で重要なポイントであることが示唆された。これは、本研究の成果といえる。今回の調査協力者においては、いずれの文化変容タイプであっても、うつ傾向はそう高くないと考えられるが、その中でも統合と分離、そして統合と周辺化においてうつ傾向の有意差が観察された。仮説は部分的に支持された。しかし同化と統合の文化変容方略を取る調査対象者間では、うつ傾向の有意な差異はなかった。これは同化タイプに分類されている人々も、先に述べたように今回の調査対象者らはエスニック性が高めであったため、同化タイプであっても少なからずエスニック性を残している人が含まれていると考えられる。そのため有意な差異がでなかった可能性がある。

うつ傾向とホスト志向性の関連に関する知見は、日本に住む韓国人研究の結果と一致している（李, 2013）。李の研究と今回の研究とでは、ホスト国や民族性の対象が日本またはブラジル、日本または韓国、などと異なっているがホスト国志向を持つことが精神的健康の維持に役立つことに関して一致した。しかし同じ4類型文化変容態度を用いた比較研究では、異なる結果をもたらしたものもある。例えば、Jang et al. (2007) による韓国系アメリカ人の研究では、統合タイプが分離タイプと比べて不安やうつ傾向が有意に低いという。不安抑うつ傾向が低くなるためには、ホストだけではなく、ホストとエスニック双方の高い志向性が条件として示された。Ward & Kennedy (1994) は、海外に住むニュージーランドの公務員を調査した。彼らは、同じ高ホスト志向でも統合タイプの方が、同化タイプの人々よりも抑うつ傾向が低いと結論付け、その他の二つのタイプとの間には有意な違いはないとした。このように先行研究のすべてが統合タイプの利点を示したという事実にもかかわらず、文化変容態度の4つのタイプと精神的健康の特性との関連性は研究によって異なった。この違いの原因は将来の研究で探求されなければならないであろう。

また、今回の研究の協力者が総じてエスニック志向が高かった理由として、以下のような理由が考えられる。まず一つ目は、日本祭りのイベントや、日系グループの活動に参加している人たちに調査協力を求めたため、もともとエスニック志向が高い人が集まった可能性がある。二つ目に、X市自体が、サンパウロ州に次いで日系人の多い街であり、ブラジルの地で日本の生活様式を保つ条件がかなり整っており、エスニック性を保持しやすい地域であったとも考えられる。X市には日本食レストラン、日本雑貨や食料品店、日本語で会話ができる場所が生活の身近にあり、これらに接することで容易に日本の習慣や民族性を維持することができるだろう。今回の調査におけるエスニック性の高さの主要因の検証のためには、ブラジルの他地域において、質問紙の回収方法に配慮した調査を実施する必要があり、今後の課題といえる。

エスニック志向に関しては課題が残るものの、今回の調査において、ホスト志向性の高低が、うつ傾向の主要な影響予測因子であるという示唆は得られた。つまり、ホスト社会

の生活、習慣を取り入れ、うまくなじむことが出来れば、精神的にも安定した適応に有利ということである。そこで次章からは、在伯日本人のホスト社会生活についてより詳細な検討に入る。当該社会で生活する在伯日本人は、どのような困難を感じて、それをどうやって対処しているのかを探索する。ホスト社会文化に接し、なじむことに困難を感じたとき、適切に対処が出来れば精神的健康の低下も避けられると考える。まず、第3章では、在伯日本人の留学生に焦点を当てる。短期間に渡伯の目的を達成する必要がある彼らは、困難に対しても速やかに対処をして学習に取り組む環境を整える必要がある。そのために積極的な対処を行っていると考え、まず研究の足がかりとして彼らに注目してブラジル生活における困難とその対処について検討を行っていく。

第3章

ブラジル留学における困難とその対処

第1節 研究の背景と目的

南米の中で最多の日本人留学生を擁しているのはブラジルではあるが、日本語で書かれた在伯日本人留学生の異文化適応研究は見当たらない。ブラジルにおける日本人留学生研究を行うに際して、欧米など他地域の研究を参考にしたい。

古典的な留学生の異文化適応研究として、Lysgaard (1955) の研究がある。彼はアメリカへの留学経験のあるノルウェー人留学生 200 人対象に調査を行い、Uカーブに象徴される三つの時期区分を用いて異文化適応を説明した。その後 Oberg (1960) や Adler (1975) も、異文化適応には一定の段階があるとした。近年では変化を捉えつつ、より細部に検討が移っている。例えば Pedersen (1995) は、世界各国に留学したアメリカ人学生のカルチャー・ショックについて調べた。その結果、適応は段階的に進むというより、個人的、対人的な要因を絡めて複雑に進み、単一過程ではなかったという。異文化適応を検討するには個人的要因など、その過程における背景に注目する視点が必要と考えられる。

Ting-Toomey & Hotta (2013) は、アメリカに留学している、日本人を含む 20 人の留学生を対象に質的研究を行っている。その結果、留学生たちの多くは入国時にホームシックなどのため適応感が低く、徐々に改善に向かうなど、古典的な Uカーブ理論とは必ずしもマッチしないパターンを示した。そして適応感の高低は、学業成績や親しいパートナーとの別れなど個人的な事情の影響を受けており、ホストや母国の友人らとのネットワークの構築も影響しているようだと言っている。こうして最近では、留学生の適応に至るまでの道程は人によって異なり、適応感の高低は多要因に影響されるものと理解されている。影響要因のうち、特にホストや同胞のネットワークに関しては、日本人留学生対象の研究でも言及がある。以下にいくつかの研究を挙げる。Brain (2012) は日本人留学生の出発前教育に関する展望論文の中で、留学生が社会環境に適応できないと、学業にもマイナスの影響があるとして、適応のためのいくつかの示唆を述べている。その一つとして社会的ネットワークに注目し、Ting-Toomey ら (2013) と同様にホスト国の学生との友好関係、および同胞との接触が、留学生の異文化適応促進に役立つと述べている。小島・深田 (2009) はイギリス短期留学の日本人学生の社会的相互作用の研究において、ホスト国での適応には、ホストに加えて母国人および母国文化との接触が影響すると述べている。ブラジルは欧米に比べて日本人留学生数が少ないため、同胞との接触はより機会が限られるだろう。日系人は多いが、そこに同じ効果があるのかは把握されていない。

また、ブラジル社会に目を向けると、治安は日本と比べて不安定である。英語がほとんど通じないため、公用語のポルトガル語が使えないとホストとの意思の疎通も難しい。欧米と比べて同胞が少ないため対人的資源は乏しいといえるかもしれない。したがってブラ

ジル社会に適応するためには困難が生じやすいと予測される。

本稿では、ブラジルの日本人留学生が異文化滞在に伴う具体的な困難体験とその対処に焦点をあて、個人単位で分析することで、異文化適応の実態を多様で複雑な要因の絡みとともに読み解こうと考えた。困難体験は、異文化接触によって困難感をおぼえたり、ストレスを感じたりした体験として、具体的な事例からその詳細を把握する。異文化適応については、社会的側面と心理的側面の要素に分けて捉える見方もあるが（Ward & Kennedy, 1994）、今回は適応の全体像を包括的に捉える探索的研究という狙いから、分割はせず実際の体験そのままに両側面を含めた困難と対処のありようを探ることとしたい。

日本人留学生がブラジル滞在で出会う困難は多様なものと想定し、個々の体験に眼を向け詳細に見ていく。そして言語、治安などの社会環境、ホストや同胞などの対人環境といったいわば社会的側面、および属性や渡伯の動機など個人的側面が、どう関与して困難体験が生じていくのかを読み解いていく。続いて困難体験の中で彼らが講じた対処を拾い出し、その体験をいかに乗り越えていったかを、適応に至る道筋として眺めてみたい。特にホストや同胞とのネットワークに注目し、適応促進のリソースを見いだしたい。対人的要因では、社会状況にあわせてブラジル人のうち、日系人を区別してその影響を見極める。こうした意図から、今回は在伯留学生に「もし日本にいたら体験しなかったであろう体験として、ホスト国で何か困難感やストレスを感じた体験はありますか？」と尋ねる。その語りから、この国で留学生が出会う困難を整理し、背景となる社会的な側面と、体験を形作っていく個人的な側面との関わりをみていく。

研究上の問いは、以下のように設定して、この問いの答えを読み解いていく。

RQ1：在伯日本人留学生において、異文化滞在に伴う困難体験とはどのようなものであり、それにどのように対処しているか。

RQ2：社会的側面としての社会環境と対人環境、および個人的側面は、在伯日本人留学生の困難体験とその対処にどのように関わっているか。

第2節 方法

2.1 調査協力者

調査協力者は、著者の知人から友人知人を紹介してもらい、紹介者を次々と繋いでいくスノーボールテクニクにより依頼した。今回の協力者5人（女性4人、男性1人）の属性を、Table III-1 に示す。全員、滞在予定期間は約1年。調査時には渡伯3～5ヶ月目であった。近年は短期留学が増加しているために、滞在が比較的浅い時期の適応の状態に注目した。ポルトガル語力を自己判定してもらったところ、①日常会話も難しい、②日常会話程度、③あらゆる場面で使いこなせる、の3段階評定で全員②と答えた。彼らの主たる留学目的は、ブラジル経済などの専門分野を学ぶこと、または留学後にブラジルの日本企業で即戦力として働くために、現地の会社でビジネス研修に従事しつつ語学力を磨くことで

ある。彼らはポルトガル語を学ぶために語学学校にも通っていた。調査の趣旨とプライバシーの保護、得られたデータは研究目的以外には使用しないこと、及びいつでも協力の中止が出来ることなど倫理的配慮について説明して承諾を得た。さらに面接を録音することの理解を得て実施した。謝礼として文具（筆ペン、一筆箋）を渡した。

Table III-1 調査協力者の一覧

記号	性別	年齢	在伯年数	職業など ¹⁾	滞在目的	帰国予定	同居家族 ²⁾	ポルトガル語 ³⁾
A	女	20代	4ヶ月	学生	留学	あり	◎ホスト家族・韓国人留学生・Bさん	2
B	女	20代	4ヶ月	学生	留学	あり	◎ホスト家族・韓国人留学生・Aさん	2
C	女	20代	3ヶ月	学生	留学	あり	日系のホスト家族	2
D	女	20代	4ヶ月	学生	留学	あり	ホスト家族	2
E	男	30代	5ヶ月	会社員	留学	あり	◎ドイツ系のホスト家族	2

注¹⁾ Eは会社員だが、語学研修として渡伯していたので留学生に含めた。

注²⁾ ◎は、同居家族の中に日本人や日本語話者がおり、日本語を話すことが出来た。

注³⁾ 自己判定によるポルトガル語レベル；1 日常会話も難しい、2 日常会話程度、3 あらゆる場面で使える。

2.2 調査地

第2章と同じ

2.3 調査の手続き

日本人及び日系人たちの集まるホームパーティやイベント会場のブースに筆者が訪問し、そこで引き合わせてもらった相手とお互いに自己紹介をして、面談の前に複数で30分～50分程度の雑談をした。雑談の話題は社会的なニュースなどの世間話や買い物の話など日常の情報交換であった。十分に打ち解けた雰囲気では会話ができると判断した後に、静かに話せる場所へ移動して、個別に半構造化面接による調査を行った。調査面接の時間は30分程度。語りをICレコーダーに録音し、逐語録を作成して分析に用いた。

分析方法はSCAT法を採用した。SCATとは大谷（2011）によって考案された、質的研究法の一つである。手続きの概要は、まず面接記録を意味単位に分割してから段階的にコード化し、言い換えや説明の言葉を探しつつ、データに潜む意味を見いだしていくというものである。一事例の語りなど比較的小さな質的データの分析にも有効とされる。作業過程を記入していく表には、分析の過程が明示的に残るため、自分の分析の妥当性を確認しやすく、リフレクションを分析者に迫る機能があるといわれる。以下に調査協力者Aさんの語りの一部を記入した作業表（Table III-2）を使って、分析作業の進め方を具体的に説明する。

Table III-2 SCAT による分析作業表の例

番号	テキスト	〈1〉 テキスト中の注目すべき語句	〈2〉 テキスト中の語句の言い換え	〈3〉 左の説明をするようなテキスト外の内容	〈4〉 テーマ・構成概念	〈5〉 疑問・課題
9	なんかブラジル人ってスキンシップ多いじゃないですか。日本だと全然そういうことないし。こっちの人って公共の場でもいちゃいちゃしたりとか。バスとかでも普通にハグしたりとかしたのを見て、こんなことするんだって、すごい思いましたね。だいたい今は慣れました。最初はすごい戸惑いましたけど。	日本だと全然そういうことないし・公共の場でもいちゃいちゃ・こんなことするんだ・最初はすごい戸惑い	異文化を実感。日本との価値観、習慣の違い。心理的ゆらぎ	コミュニケーション方法、ふるまい、習慣の違い（原因）戸惑いや驚き（結果）	日本とブラジルの文化差とその心理的影響。	挨拶は体験する機会が多いから慣れるのが早いのか？

まず語りを内容のまとまりごとに分割したものを、「テキスト」の欄に転記する。次に「〈1〉 テキスト中の注目すべき語句」、「〈2〉 テキスト中の語句の言い換え」、「〈3〉 それを説明するためのテキスト外の内容」を考えて、順に記入していく。〈1〉へ記入することによって、分析者はデータの中の着目すべき点を明確化する。〈2〉での語句の言い換えをして、個別的な事象をどう一般化できるかを検討する。〈3〉の作業では〈2〉の背景や条件、原因、結果、影響、比較などを吟味することになる。このような手順を経て語りの意味するところを熟考し、言葉にしていく作業を行ったうえで、内在する意味を読み取ったものが「〈4〉 テーマ・構成概念」の欄に書かれる。こうしてデータに潜在する意味を見出し、テーマの表現や概念化を試みるのである。分析の過程で出た疑問や解決すべき課題は「〈5〉 疑問・課題」の項に記入しておく。分析の過程では、その疑問や問題が解決されるよう分析の見直しに努める。続いて「ストーリーライン」をつくる。これは〈4〉 テーマ・構成概念欄の記載をつなげて文章化したものである。ストーリー化をする過程で、テーマごとの相互の関係性を見直したり、新たな概念が浮かんで分析を修正したりすることも行われる。これは SCAT の特徴であり、ストーリーラインを記述することでこれまでの分析の再検討をし、分析の妥当性を高めていく。そしてストーリーラインの重要な部分を選んで項目化した場合は「理論記述」と呼ばれる。これは普遍的な一般原理ではなくて、「このデータから言えること」を述べた文章を意味する。

さらに分析を周到に吟味するため、今回はインタビューを行った第一筆者と、異文化間

心理学を専門とする大学教員の第二筆者とで、全てのデータと分析の結果を照らし合わせて最終的な合致に至るまで点検を行った。

第3節 結果と考察

3.1 調査協力者ごとの分析結果

3.1.1 Aさん

Aさんの結果 (TableIII-3) から、順にEさんまで説明していく。

TableIII-3 Aさんの語りの分析

テキストの概略 (注目すべき語句を含む)	ストーリーライン (テーマ・構成概念)
<p>A1 ブラジル人ってスキンシップ多い。日本だとそんなこと全然ないのに、公共の場でイチャイチャ。最初はすごく戸惑った。すぐ慣れたけど。</p>	<p>日本にはないスキンシップの多さ、A1 <u>日本とブラジルの文化差</u> に <u>心理的影響</u> を受け、動揺するが、すぐに慣れて平気になる。入国当初はとにかく A2 <u>言葉の壁</u> を感じ、身振り手振りを使って <u>できる方法</u> で伝えようとする。</p>
<p>A2 入国して間もなくの頃。言葉での意思疎通が難しく、身振り手振りで伝えた。</p>	<p>A3 <u>ホスト社会のシステムに不慣れのために</u> バスに乗り間違えて <u>不安やストレスを感じ</u> るが、A4 その時 <u>同胞も一緒だったこと</u> で落</p>
<p>A3 バス表示が日本のシステムと違うことから、初日にバスを乗り間違え知らない場所へ。随分ストレスになった。</p>	<p>ち着くことが出来、自らアプローチして <u>困難を乗り切る</u> 経験をする。A5 <u>治安に関する事前情報により</u> <u>最初に警戒、恐怖が強い</u>。しかし、<u>時間が経つにつれ却って安心感が増す</u>。</p>
<p>A4 mAc (ホストマザー) に電話をし、乗客の人に事情を話してもらい。帰り方がやっと分かった。Bさんと一緒にじゃなかったら、パニックだったと思う。</p>	<p>クラスでは英語も通じないため、A6 <u>現地語を上達するしか意思疎通の道がないと考える</u>。</p>
<p>A5 すごく治安が悪いと聞いていた。一人で歩くのも怖い。今は思っていたより安全かなと思う。</p>	<p>A7 また、<u>日本人と比較して</u>、<u>ブラジル人は陽気で人がいいと感じて、その特徴を好ましく思う</u>。</p>
<p>A6 クラスメートは全員ブラジル人。彼らに英語が出来るか聞くと、「ごめん、話せない。」の返事。意思疎通にはポルトガル語上達しかない。</p>	
<p>A7 ブラジル人は心を開いている、陽気、人を助けようという気持ちがある。日本人と比べて、ブラジル人の性格が好き。</p>	

調査協力者ごとに語りを分析していったところ、作業表は長大なものになった。全作業過程の表示は膨大になるため、本稿では分析過程を集約し、語り (テキスト) の概略とストーリーラインに絞って表に整理し、必要な情報と結果の集約とを呈示した。

Aさんの語りは、12のテキストに分けられた。そのうちブラジル特有の社会事情に触れながら、困ったことやストレスを感じたことに言及したもの、すなわち本研究の主題に関

わる7つのテキストに注目し、A1からA7として「テキスト(語り)の概略」欄に示した。概略化する際は、「〈1〉注目すべき語句」を組み込んで記載した。そして分析を経てテキストから読み取った「ストーリーライン」は右の欄へ、矢印でテキストと対応させながら示した。ストーリーラインにはテキストの潜在的な意味を理論化した「〈4〉テーマ・構成概念」が含まれているので、それを下線で示した。

以下にBさんからEさんまでの分析表によって一人ひとりの語りの分析を示す。その後、5人の語りから読み取れる困難体験や対処のディテールと、ブラジルの社会環境に反映された困難の現れ方や対応策の特徴をふまえて、異文化適応支援への示唆を述べていく。

3.1.2 Bさん

Bさんについても同様に分析を行った。得られた10個中7個のテキストの分析結果をTableIII-4に示す。

TableIII-4 Bさんの語りの分析

テキストの概略 (注目すべき語句を含む)	ストーリーライン (テーマ・構成概念)
B1 mae (ホストマザー) とその友達と外食。ちゃんと聞いたのに聞いてもらえなくてすごく怒られて、なんかもう、むしゃくしゃ。	B1 <u>誤解の責任を自分ではなく相手に転嫁し、怒りと不満を持つ。</u> だが、相手の謝罪で心が落ち着いた。他にも B2 <u>相手の意図が理解できず、適切な対応が出来なかったため、相手の予想外な反応に困惑する。</u>
B2 異性の友人に迫られる。ブラジル人の常識が分からず、受け入れていると誤解された。ラインを利用して後で断る。	ラインなどを介して <u>間接的に意思表示する。</u> B3 <u>異文化人ゆえに対応の仕方に迷いが生じた</u> と考え、 B4 <u>友人の助けを借りて、交友関係の拗れの解決方法を模索する</u> が、
B3 ブラジル人にどう言えば理解されるのか。日本人の代表と思われることのためらい。はっきり意思表示できない。	<u>自分自身は相手を避けるという消極的対応をとる。</u> B5 <u>言葉の壁により、相手に聞き返せず放置するために齟齬が生じる</u> ということを経験するが、プライベートでは通じないことがあっても落ち込まない。一方
B4 友人に相談。仲介を頼む。学校に行きたくない。トラブルの相手を避ける。	B6 <u>学業に影響する言葉の壁はストレスとなる。</u> 耐える、努力することで徐々に解決されてきたと感じる。 B7 <u>クラスメートの日系人から心を開いてくれたことに喜びを感じ、共通の話題で親近感を持つ。</u>
B5 言いたい言葉が言えない。聞き取れない。だんだんok、okって流すようになってしまった。でも日常生活の中の言葉の問題では落ち込まないかな。	
B6 授業が本当に分からなさすぎて落ち込む。耐えて、予習復習をするしかない。だんだん教授の早口の言葉が理解できるようになった。	
B7 ぼく、日系なんだよって友達になってくれて。すごくうれしかった。マンガとか共通の話題で盛り上がった。	

3.1.3 Cさん

Cさんの語りは、得られた5個全てのテキストを分析した (Table III-5)。

TableIII-5 Cさんの語りの分析

テキストの概略 (注目すべき語句を含む)	ストーリーライン (テーマ・構成概念)
<p>C1 店員さんが物を売る態度じゃないのが普通なので、びっくり。気長に待つしかない。こっちから話しかけないといけない。</p>	<p>日本では考えられない店員の客に対する態度に、<u>C1価値観、社会通念の文化差に戸惑いを感じるが、自分がホスト国に合わせるしかない</u>と考える。しかし実際は C2<u>その差につらさを感じ、日本の良さを思う。</u></p>
<p>C2 ブラジルの店員さんはお客さんを大事にしない。日本は、お客様は神様なのに。</p>	<p>語学の習熟度に関しては、C3<u>他の留学生との競争心が焦りや悔しさを生む一方、さらなる努力への動機にもなっている。</u></p>
<p>C3 他の留学生と比べ自分は中々言葉が上達しない。焦る。悔しい。もっとブラジル人と触れ合うようにしよう。</p>	<p>C4 日系人 <u>には日本人との違いを感じ、ポジティブな印象を持つ。</u>そして異文化人としてではなく、<u>気遣いとして C5日系人に合わせた話し方、挨拶をする</u>など相手に合わせる対応をする。</p>
<p>C4 日系人はおおらか。笑顔がアベルタ (大きい)。臆病さがなく、やさしい。日本人とそこが違う。</p>	
<p>C5 日系人には言葉を標準語にしたり、ゆっくり話したり。挨拶の仕方を合わせたり。</p>	

3.1.4 Dさん

Dさんの語りからは、18個中10個の分析を示した (TableIII-6)。

TableIII-6 Dさんの語りの分析

テキストの概略（注目すべき語句を含む）	ストーリーライン（テーマ・構成概念）
D1 グループワークはちゃんとやらないと、みんなの責任になる。私にとってはすごく難しい。	D1 留学生にとってグループ作業はプレッシャーに。出来ないで済ませられないが、Dさんにとっては、話し合いや文献を読むのも難しい。
D2 やらなくちゃいけないことがいっぱい。本当は一昨日まで落ち込んで、もう帰りたいと思っちゃったんです。	言葉の壁を痛感する。D2 帰国したくなる程の学習上の困難を感じ、負担が重くのしかかっていた。
D3 でも（同胞の）ホームパーティに行ったり、気分転換して、だんだん元気になって、出来なくていいや。	しかし、D3 同族との触れ合い、発散することが精神的安定と肯定的な考えをもたらした。
D4 日系の方に勉強を手伝ってもらって、それは本当に良かった。つらい時は日本語をしゃべれる方に頼らないと。別に悪いことではないな。	D4 日系人は学習支援者として、また日本語を理解し、精神的安定が得られる人として認識し、支援を依頼する自分自身も肯定する。
D5 日本語をしゃべらないで終る日が多い。会話に入らなくてニコニコしているだけ。ああ今日もわかんなかった。	D5 日本語が使えず、ホスト言語の理解が困難な時、ストレスが高まる。渡伯当初は出来なくて当たり前だが、
D6 最初はワクワク。全然割り切れる。4ヶ月目の今は、まだことばわかんないってすごく落ち込む。	D6 滞在期間が長くなると言語力の不足の認識が否定的になる。
D7 日本の音楽を聴いて、日本の楽しいことを考えて、日本の友達に励まされて、またがんばろうみたいな。	こんな時は、D7 母文化、日本の友人と触れ合い、活力につなげる。
D8 ブラジルは危険、危険って言われ続けていた。携帯とか、道では絶対使っちゃあだめ。すごく警戒しながら歩いて。今はさすがに慣れて、昼間は安全。	渡伯前から聞いていた D8 危険情報に過敏に反応するが、滞在中に徐々に危険度の認知を修正し、危険回避の仕方学ぶ。
D9 初めてジャポネーザ（日本人）!と叫ばれた時はびっくり。襲われるかと思った。慣れても最初の心は忘れていけない。	D9 とにかく相手の意図が分からないと恐怖。また、慣れても警戒は必要と自戒する。
D10 お年寄りの日系人は私より日本的な心を持っている。癒される。でも挨拶とかはブラジル人。日本人の心とちょっと違う。日系人は明るく、日本人とは違うので接しやすい。	D10 高齢の日系人には、安堵感。若い日本人より日本的と感じる。その一方で日本人とは異なる面も見出して、それを好ましいと感じる。

3.1.5 Eさん

Eさんの語りからは、10個中8個の分析をTableIII-7に示した。

Table III-7 Eさんの語りの分析

テキストの概略 (注目すべき語句を含む)	ストーリーライン (テーマ・構成概念)
<p>E1 日本から送ったものが通関で止まっている。難しいポルトガル語はほとんど理解出来なかった。すごく困った時は日本語で (ホスト家族の次男と話す)。</p>	<p>E1 <u>入国して間もない頃は、語学力の不足によって生活に支障をきたす。</u>自分ひとりで通関や銀行とのやり取りは出来ない。<u>日本語での支援が必要</u>だった。</p>
<p>E2 困惑したのは、事務手続き関連。銀行。自分の立場を説明する語学力がない。まだ一ヶ月経っていなかった。</p>	<p>E2 <u>言語的自立が出来なければ、生活の自立も困難</u>で、E3 <u>生活に必要な手続きを整えるために E さんの場合は ホスト家族が</u></p>
<p>E3 ホスト家族の父が通訳してくれた。彼らがいなかったらすごく悩んでいただろう。</p>	<p><u>支援してくれた。</u>支援者がいなかったら大変な困難となるだろう。</p>
<p>E4 先生ともめた。急に授業内容を変えと言われても納得がいかない。何の目的で? 全く分からなかった。かなりもめました。</p>	<p>語学学校で教師から一方的な授業の変更を通告され、ホスト国と E4 <u>日本との違いを感じ困惑する。</u>しかし相手に従わないで <u>主体的に、自分の考えを伝える。</u></p>
<p>E5 日本人だったらちゃんと説明してくれるのに。彼らは一切しない。すごく文化がちがう。</p>	<p>E5 <u>ホストの態度の理解できなさを、文化の違いと捉える</u>が、それでも</p>
<p>E6 すごく行き当たりばったりの学校のやり方に不信感があって。それが爆発してしまった。</p>	<p>E6 <u>先生の対応が軽率に思えて怒りを感じ、はっきり異論を主張する。</u>このように譲れない</p>
<p>E7 そんな急にええられても困る。彼らが謝罪のメールを送ってきた。こちらも大人の対応をして非礼を謝った。</p>	<p>事情のときは、E7 <u>ホストにブラジルで学ぶ日本人の価値観を主張する。</u>結果的に <u>和解を引き出す</u>ことが出来た。</p>
<p>E8 日系人は、心はブラジル人。でもよりルールを守ろうという姿勢が日本的。</p>	<p>E8 <u>日系人は、ブラジル人ではあるが、日本的な要素を持つブラジル人と認識する。</u></p>

3.2 在伯日本人留学生の困難体験とその対処

5人のストーリーラインを全て眺めてみると、およそ以下のことが注目される。Aさんは、社会システムや習慣に文化差を感じて戸惑うが、積極的にブラジルの人や社会の良さを見だし、危険を避ける現実的な要領も身につけた。言葉の困難はあるが、非言語の手段や支援の要請で補い、話すしかない覚悟を決めて習得に励んだ。Bさんは、言葉が通じず怒りと不満を覚え、相手の意図が分からず対応に苦慮した。学業に必要な言語習得には励むが、私的なすれ違いは放置して誤解され、友人に助力を求めた。日系人には共通性に親近感を覚え、その接近を歓迎する。Cさんは、価値観や社会通念の違いに戸惑いとつらさを覚えるが、ホストに合わせることにした。相手に気遣う意味で、挨拶や言葉を合わせる。周囲より語学力が劣ると意識して努力した。日系人の気質などの異質さは肯定的に見ている。Dさんは、学業がストレスで、語学力不足の中でのグループ作業は精神的にき

つい。日本人との接触で安定し、前向きになれる。日系人は接しやすく好ましい、頼りになる支援者で、高齢者には癒しを感じる。治安の不安は徐々に緩和されるが、警戒が必要と自戒している。Eさんは、渡伯当初は語学力不足で自立できず、ホストの日本語話者に助けられた。語学教師の言動には文化差を感じる。自分の価値観に基づき明確に主張したところ、議論と和解ができた。日系人は日本的な要素を持つブラジル人と捉える。

以上のように、5人はホスト家族の環境や大学のクラスなど個人的事情の違いはあるが、治安や慣習など社会と文化の違いには戸惑いながら、生活経験を重ねて知識や支援を得て次第に慣れていき、人と社会の良さも見いだしている。下記でさらに詳しくみていく。

3.2.1 困難を感じた体験

在伯日本人留学生5人において、異文化滞在に伴って体験した困難の生じ方をみていく。滞在3～5ヶ月を過ごした彼らは、各人が二つ以上の困難体験を語っていた。

在米日本人留学生対象に異文化適応調査を行った Sabet (2009) によると、120名中115名がアメリカ留學生活で何らかのストレスを感じたと答えており、留學生活中の困難体験はほぼ避けられないという点で、本研究と類似の指摘といえる。困難体験の種類としては、Sabet (2009) は、学業または経済的問題が、Ting-Toomey ら (2013) は、経済的問題、学業と寂しさが影響していたと述べている。今回は、経済的問題はみられないが、学業に関わる落ち込みやホームシックの語りはある。これらの困難体験は言葉が通じない、理解できないという彼らのポルトガル語能力の不足に起因している。言葉に関わる困難体験は今回の調査対象者全員にみられ「ストレス」、「焦る」などの言葉と共に表現され、言葉のわからなさが学びをかなり大変なものにしていることがわかる。しかし日常生活では言葉のハンディは気にならない、入国当初に言葉がわからないのは当たり前という捉え方もあり、苦痛の度合いは目標や要求水準、生活形態次第で変わるともいえる。反応の仕方にも個人差がみられ、適当に答えて問題を増幅させたり、期待したほど語学が上達しないことで自己評価が低下して、困難感が強まったりする者もいた。Pedersen (1995)、Ting-Toomey ら (2013) は、困難を感じる時期や内容は対人的、個人的事情などによって異なることを指摘しているが、今回も個人的な要素と社会環境の特徴が絡み合って困難が生じている。

その他困難体験に関わるブラジルの社会環境には、あいさつの仕方、バスの表示、銀行の手続きなどのシステムの違い、およびサービスの考え方や異性の行動の解釈など価値観や習慣のずれがある。そして支援源になったりトラブルの原因になったりする、対人的な要因も重なる。言葉がうまく通じない、相手の意図が読めない、日本の常識ではありえないことが行われるなどの場面で、相手の言動を誤解したり意見の相違が生じて衝突したりしている。

3.2.2 対処の試み

困難体験への5人の対応は様々であったが、学業上の言語的困難に関しては一様に、もっとポルトガル語を勉強する、ホストと関わるなど前向きな自助努力が語られた。社会システムや習慣・価値観の違いに対しては、ホスト国に合わせる、慣れるという相手寄りの方法と、意見を対立させ、自身の価値観を相手に伝えるという自文化寄りの方法がみられた。今回の調査協力者の中では、唯一Eさんが他者と議論した経験を語った。Eさんは社会人なので、仕事上の責任遂行に基づく主張であった可能性も考えられる。

人的資源は対処のため頻繁に使われている。同文化を共有する同胞や日系人とのふれあいが癒しになり、具体的な支援も受けている。支援者にはホスト、日系人、同胞、日本にいる日本人が挙がっていた。Dさんは落ち込んだときの対処として、同胞らのホームパーティに行く、日本の友達に励ましてもらうなど、同胞や母文化に接触することで精神的な安定を図っており、それで困難やストレスに立ち向かうモチベーションを持続することが出来たという。Dさんは勉強を日系人に日本語で手伝ってもらっている。Eさんも、困難時に日本語が通じるホスト家族の次男に、日本語で支援してもらった。ホストの日本語話者は、滞在初期の留学生には特に重要な存在といえる。日系人は日本語を話す人も多く、文化を共有する部分を持ちながら、ブラジル人としての語学力と常識も身につけているので、かなり行き届いた支援者となりうる。また日本語は通じないがEさんはホストファザーに、Bさんはホストの友人、Aさんはホストマザーとその場に居合わせたホストに困難への対処を依頼して助けてもらっており、支援に関してホストの存在感も高い。

3.3 社会環境と異文化適応支援への示唆

今回の5人の困難体験やその対処には、ブラジルの社会環境が色濃く反映されていた。上記で触れた日系人の存在もその一つだが、加えて治安への不安、ポルトガル語に集約される言語環境、ホストの気質が注目される。Brain (2012) は、学生達の留学前プログラムにより、新しい国の環境に適切に準備するために必要な情報を伝え、それにより学生達が異文化接触時における危機の程度の緩和とその期間の短縮が期待できるとしている。ブラジル留学を考えている日本人学生を対象とする、異文化適応支援のための教育的関わりについて、今回の調査における5人の例から考えてみるなら、以下が示唆されよう。

3.3.1 日系人

今回日系人の知り合いがいなかったのはAさんのみで、ほか4人は、共通の話題が持てる、時間を守る、おおらかなど、総じて日系人に対して肯定的イメージを持っていた。日系人は言葉以外にも文化の共有における日本人らしさと、ふるまいや考え方におけるブラジル人らしさの双方が好感の大きな理由となっていた。Brain (2012) は、日本人留学生における同胞との接触は意義があるとしながら、あまりに同胞ネットワークに頼りすぎると、

異文化適応プロセスの妨げになると述べている。だが両文化を持つ日系人とのネットワークなら、頻繁に利用してもホスト文化または母文化のみに偏ることはないので、適応プロセスの妨げになるとは考えにくい。迫（2015）の研究では、永住予定の在伯日本人にとって、日系人がストレスになるとのケースが見られたが、今回の5人においては全くない。この理由として、当該社会に不慣れな留学生にとって日系人は支援者としての役割が大きいこと、つきあいが一定の期間と場面に留まることが考えられる。

留学予定者に対しては、これまでのブラジル留学経験者が日系人と好意的な関係を築きながら、しばしば助けてもらっている例が見られることは伝えていくと良いだろう。

3.3.2 治安

Aさん、Dさんはブラジル入国当初、道を歩くだけで非常に緊張したと語っている。その後滞在する中で詳細な情報を得て、危険回避の方法や安全な暮らし方を知り、安心感が持てるようになったという。留学予定者への渡伯前の情報提供は、危機感をあおるばかりにならないよう、治安に関する正確な情報を伝え、渡航後の生活の仕方、安全な暮らしへの見通しを具体的に教えるべきであろう。渡航後には現地で速やかに積極的な情報収集を開始し、警戒を現実的な対応に変換していき、危険回避の術を学ぶことが望まれる。

3.3.3 ホストの気質

ブラジル人と日本人との違い、いうなれば異文化性は、言語や習慣、開放的で豊かな感情表現などが認識されていた。どれも日本とは異なるからこそいいという。異文化性はカルチャー・ショックや異文化ストレスの文脈で否定的に語られることが多いが、ブラジル留学では文化の違いが必ずしも否定的に捉えられず、日本とは違うからこそいいと肯定的に受け止める語りが目立つ。こうしたまなざしは、日系人にも他のブラジル人に関しても向けられていた。街中で困っていると誰かが声をかけてくれ、言葉に不慣れでも何とか理解しようとしてくれる「優しさ、親切さ」をホストに強く感じるとAさん、Cさんは語っていた。ブラジル留学予定者には、積極的に良さを見いだしてつきあう姿勢が期待される。

3.3.4 ポルトガル語

日本では、現在小学校から授業で英語に触れることが出来る。それでも英語圏への留学では言語の困難が経験される。ましてやポルトガル語は、ほとんど学校では学習する機会がないため馴染みが薄く、そのハンディは大きいものとなる。Aさんは当初現地のクラスメートに、英語でのコミュニケーションを試みているが、全く通じなかった。このようにブラジルでは英語に頼ることが出来ないのも、ポルトガル語力の不足は不自由に直結すると考えられる。留学予定者は、できる限り語学力を高めてから行くことが理想的である。

第4節 総合考察

困難体験の対処の仕方を眺めていくと慣れる、合わせるといった馴化的な対処、積極的に意見をいう主張的な対処、学習や情報収集に努める自律的な対処、気分転換をはかる転換的な対処、同胞やホストに支援を頼む依頼的な対処がみられる。困難の基本的な領域や対処のスタイルは各地の異文化適応と重ねて理解できる側面を持つとしても、今回その現れ方や対応の具体策は滞在先の社会文化的文脈に大いに依存することが示された。

在伯日本人留学生は、日系人、ホスト、同胞との対人的ネットワークを活用しながら、問題解決を図っている。留学生活における同胞およびホストとの接触の重要性は、Ting-Toomeyら(2013)、小島ら(2009)の研究と重なる結果である。竹下(2001)によると、在台湾日本人妻は滞在が長くなるにつれ、日本在住の日本人から台湾の在住日本人へと情緒的サポートが移行し、結びつきが深まった。次第に現地事情に精通した支援者が活用されていくことがわかる。今回、日本文化を保ちつつ当該社会に生きる日系人と、どんな関係を築き、サポートを得ているのかを描き出したことは、従来の在外日本人留学生の異文化適応研究にはない知見と考えられる。

ブラジル文化にみられる人付き合いの流儀は、今回は総じて好意的に受け止められていた。高濱・田中(2009)らは日本人学生が留学前にソーシャルスキルを学習することによって、留学前の不安が低減し、対人関係の構築に役立ち、留学体験を肯定的にとらえることができる」と述べている。今回好意的に語られている挨拶表現の仕方など、ブラジル人および日系人との交流のスキルを語学学習とともに事前学習しておく、滞在初期からの対人関係形成に有用であろう。

日系人は支援者として、また親しみや癒しを提供する存在として好意的に評価されていた。このような日系人の適応支援機能を認めたことは、異文化適応研究の新たな知見の一つかと思われた。また治安への不安は、入国当初を最大として、その後低下していた。生活経験と情報収集によって、警戒心を具体的な治安対策に変換していくことが必要である。

本章では、在伯日本人留学生の語りの分析から、以上のような知見が得られた。次章では、調査対象者を広げて、本章と同様にブラジル生活における困難とその対処の探索を行う。そしてさらに、留学生を含めた在伯日本人の語りから得られた知見の活用を視野に入れ、有用な困難対処を基にブラジル生活に役立つソーシャルスキルの検討を行う。対象者を広げることで、困難やその対処もより多岐にわたると予想され、バラエティーに富んだ対処を検討することにより、多くの日本人に適用可能なスキルの産出が期待される。

第4章

異文化滞在時の困難対処とソーシャルスキルの検討

第1節 研究の背景と目的

前章では留学生に焦点を置いたが、本章では、海外赴任者やその家族、国際結婚など、様々な理由、そして滞在期間、帰国の有無など多様な背景を持つ在日日本人を対象とする。まず、治安状況や社会システムの相違など社会生活上の困難体験と、ホストや同胞との対人関係に関わる困難体験に主に注目する立場を起点に、困難の多様さを視野に入れて「異文化生活に起因する」困難を広く尋ねることとする。そして彼らが、困難への対処として用いた認知や行動を明らかにしていく。次に困難対処として得られた認知や行動面の具体的対処をもとに、社会生活面および対人面において、ブラジルに住む日本人にとって有用なソーシャルスキルを探索的に検討していく。

稲村（1980）、大西（1992）らは、会社員の夫と帯同の妻、留学生など多様な滞在理由の人たちが海外でメンタルヘルスの不調をきたした症例を紹介している。それらは個々の性格など内的要因のほか、言葉や習慣の違い、滞在先の環境など様々な外的要因によって、高ストレスの状況下に置かれたためだという。Furnham & Bochner（1986）は、海外生活における社会システムの差異で発生する社会的困難に注目している。克服するためのホスト社会における社会生活的な技能の欠如に起因すると解釈し、適切なソーシャルスキルの必要性を示唆している。また、田中（2010）は、円満な対人関係をホストと構築することが異文化滞在では有用であるとし、異文化圏での人付き合いに役立つ社会的行動の異文化間ソーシャルスキル学習を試みている。適切なソーシャルスキルを使うことで困難感が軽減するとすれば、それは精神的健康の維持向上に役立つだろう。異文化におけるソーシャルスキルは、社会生活面におけるスキルと、対人的なスキルの両面をとらえていく必要があると考える。

異文化滞在者の対人関係には、ホストをはじめとする異文化性を持つ人々のほか、同胞との対人関係が存在する。稲村（1980）や鈴木（2012）は、異文化の中での同胞との付き合いについて、否定的側面を指摘しているが、叶（2015）は、海外赴任者の妻達が、パーソナル・ネットワークを利用して同胞からの支援を受けていたという肯定的側面を報告している。先住の同胞と良好な関係があれば、慣れない異文化生活において役に立つ情報や支援を、母語で受けることもできるだろう。異文化ではホストらと共に、同胞との対人関係を円満に構築するスキルもまた有用となる。本稿では、この同胞との対人関係の視点も組み込みたい。

研究上の問いは、以下の通りである。

RQ1: ブラジル生活において、日本人は何に対して困難を感じているのか。困難の内容や生じ方はどのようなものか。

RQ2: どのように困難への対処をしているのか。

これらの答えを見出したうえで、ブラジルにおける異文化滞在者に有用な困難への対処を整理し、スキルについて検討を行う。

第2節 方法

2.1 調査協力者

調査協力者はブラジル X 市に居住する日本人 15 人(男性 5 人、女性 10 人)である (Table IV-1)。国際結婚は 6 人で、その子ども (小学生 3 人、幼児 2 人) は、全員現地の学校や幼稚園に通っていた。日本人同士の結婚は 8 人 (含単身赴任者) で、その子ども (小学生～高校生) 5 人はインターナショナルスクールに在学し、幼児 2 人は現地の幼稚園に通っていた。

TableIV-1 調査協力者一覧 (在伯年数順)

記号	性別	年齢	在伯年数	職業など ¹⁾	滞在目的 ²⁾	帰国予定	同居家族 ³⁾	ポルトガル語 ⁴⁾
F	女	40代	3ヶ月	主婦	帯同	あり	日本人夫	1
G	女	30代	1年2ヶ月	主婦	帯同	あり	日本人夫・子ども	1
H	女	40代	1年3ヶ月	主婦	帯同	あり	日本人夫・子ども	1
I	女	30代	1年6ヶ月	主婦	帯同	あり	日本人夫・幼児	1
J	男	50代	2年1ヶ月	会社員	赴任	あり	なし(単身赴任)	2
K	女	30代	2年7ヶ月	主婦	帯同	あり	日本人夫・幼児	2
L	女	30代	3年6ヶ月	会社員	結婚	未定	◎ブラジル人夫・子ども・幼児	3
M	女	30代	4年4ヶ月	主婦	結婚	なし	◎ブラジル人夫・幼児	2
N	男	30代	6年3ヶ月	自営業	就労	なし	○ブラジル人妻	2
O	女	50代	6年6ヶ月	主婦	帯同	あり	日本人夫	2
P	男	40代	10年	会社員	結婚	なし	○ブラジル人妻	3
Q	男	30代	10年1ヶ月	自営業	就労	なし	なし(独身)	3
R	女	40代	19年5ヶ月	会社員	就労	なし	◎ブラジル人夫・子ども	3
S	女	60代	25年	自営業	就労	未定	日本人夫	3
T	男	50代	30年	会社員	就労	なし	○ブラジル人妻	3

注¹⁾ 「会社員」は、会社組織に勤めている人。「自営業」は、店舗など個人で仕事を運営している人。

注²⁾ 「帯同」とは、海外赴任者の妻。「赴任」とは海外赴任の就労者。「就労」は自営業や現地採用の就労者。「結婚」は国際結婚。

注³⁾ ○は、家庭内言語がホスト語のみ。◎は、家庭内言語がホスト語および日本語。ここでいう「子ども」は小学生～高校生、「幼児」は未就学児をさす。

注⁴⁾ 自己判定によるポルトガル語レベル：1.日常会話も難しい、2.日常会話程度、3.あらゆる場面で使える。

協力者の在伯年数は、3ヶ月から30年と幅が広い。当初は、滞在年数10年以内の日本人などに限定しようとした。しかし滞在30年の長期滞在者も、滞在1年未満の滞在者と同様に依然として困難を抱えて対処をしていたことがわかり、滞在年数が数十年にわたっていても調査対象に含めた。調査は、第一筆者がX市に3週間滞在し、2013年7月中に実施した。第一著者の知人である在伯日本人に協力を得て、スノーボールサンプリングによって研究協力の依頼をしていった。調査の趣旨とプライバシーの保護、いつでも協力の中止が出来ること、および得られたデータは研究目的以外には使用しないことなど倫理的配慮について最初に説明し、承認を得た。謝礼として文具（筆ペン、ボールペン）を渡した。

2.2 調査地

調査地は、第2, 3章と同様である。

2.3 調査の手続き

面接の方法は、第3章と同様である。

分析方法は、録音された語りから逐語録を作成して、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下、M-GTA）を用いて検討した。木下（2007）によると、M-GTAは、人と社会、人と人などのインタラクティブ性を検討して、分析結果を現実場面に応用し実践に生かすことを目的とした研究に適しているという。今回は、ホスト環境における社会文化的な困難に対するソーシャルスキルに注目し、その教育応用の可能性を意識しているため、こうした狙いがこの手法と馴染むと判断した。語りの中から、ブラジル社会や文化に起因する困難の語りを集め、感情を含む認知と行動にわたる効果的な心構えや対処行動の抽出を試みた。

M-GTAは分析の段階からインタラクティブ性がある。まず分析焦点者を決めて、その語りから概念や定義、具体例などを記したワークシートを作成する。そして二人目以降の語りはワークシートと比較検討しながら、追加、変更、削除を繰り返す。そして徐々に最終的な概念が形成される。したがって、その概念は、より一般化され、多様な条件で滞在する日本人に適用可能なものになると考える。一人ひとり进行分析するSCATの方法が、「縦に力点を当てる」というならば、分析対象者の語りを順に相互比較しながら収束させていく方法は「横に力点を当てる」といえよう。このように複合的な見方で探索するために、本章の研究では第3章とは異なった分析方法を採用する。

第3節 結果と考察

調査協力者の語りについて、M-GTAの手法に則り、概念の統合や削除、抽出を繰り返した。

その結果、8つのカテゴリーと23の概念・定義が産出された。このうち本稿では、社会生活と、ホストや同胞との関わりに関する7つのカテゴリーと、そこに含まれる17の概念・定義について検討する（TableIV-2）。

なお、今回扱っていない残る1カテゴリーは【日系人との関わり】である。在伯日本人にとって、日系人との関わりは他のホストとは異なり、独特な意味があるようで、その情報が膨大になったことから、次章で論じることとした。

以下にストーリーラインを示していく。ストーリーラインとは、M-GTAの分析結果について、【カテゴリー】、[概念]、《定義》を含めてできるだけ簡潔にまとめた記述である。TableIV-2の「具体例の一部」の項で、語り末尾の（ ）内の英字は、話者記号であり、文中の（ ）内は筆者による補足を意味している。困難への対処を取り出す際には、話者が明確に「対処」として語っていなくても、文脈から対処と判断できるものは加えた。例えば話者が何も対処をしていないと言いながらも、考え方を変えたのでストレスにならなくなったと語った場合、それは「考え方を変える対処」と判断した。

3.1 ストーリーライン

3.1.1 【治安・安全】 ブラジルは、日本と比べて治安が不安定で、[日常的な危機感]があり、《犯罪や交通事故の目撃・注意喚起情報により恐怖や不安・ストレスを感じる》が多い。在伯日本人たちは、何かしらの[安全に暮らす方策]を講じている。《情報を集める、自分で常に気をつけて行動することで危険回避に努める》こと、知らない人を安易に信用しないという認識を持つことも必要である。

3.1.2 【社会的相違】 ブラジルには、[社会的格差や偏見]として《人種差別や階級差別、学歴による格差・偏見がある》と捉えている。具体的な対処法の言及はなかった。日常生活場面では《社会システムの違いなどに対し、他者の助けを得る・あきらめる・受け入れるという対処をする》など[さまざまな対処法]を持つ。TableIV-2の具体例のJさんは、日本とは違う国だから当たり前と、認知的対処、すなわち切り切ることで、社会文化的な相違がストレスになることを防いでいたと解釈できる。

3.1.3 【言語的困難】 ブラジルでは、言語が[通じない不便さ]を感じる。言いたいことが通じない不便さと、自分がポルトガル語の《理解が困難ゆえに不自由を感じる》状態にある。相手にうまく[伝えるための努力]として勉強するほか、ホストや先住の同胞に通訳などの支援を要請、辞書やPC、ジェスチャーなどを活用する。《言語習得や意思疎通のために様々な努力をすること》で、この困難を乗り越ろうとしている。

TableIV-2 ブラジル生活での困難と対処

【カテゴリー】	【概念】	《定義》	【具体例の一部】
1 治安・安全	1 日常的な危機感	犯罪や交通事故の目撃・注意喚起情報により恐怖や不安・ストレスを感じる	1 バッグのジューズに消毒液が入っていたから、飲んじゃだめだよって会社の人に聞いたんですけど、全部(不用品の)回収とかもできないんですよ。(K) 「道端で飲まされた人は何回か見。自国に何回か、やっぱりブラジルなんなんと思ったりしますけどね、ちょっとそういう時に気が引き締まるんですよ。(D) 「X市は大体一日に45件ほどの通報ですね。(N)」
	2 安全に暮らす方策	情報を集める、自分で常に気をつけて行動することで危険回避に努めること	「見ず知らずの人は絶対に自分の敷地内に入れないことですね、もう、門扉を閉めて、中々外で。(P) 「庫から降りる時は周りを見たり、歩いているときに変な人がついてきていないかとか、周りを見ながらね、いつも。(R) 「みなさんが行動しているようなのを真似して、変に着飾ったりとかしないようにして、現地人になじむように。(K)」
2 社会的相違	3 社会的格差や偏見	人種差別、階級差別、学歴による格差・偏見があること	「学歴社会、階級差別などまだまだありますからね。あと人種差別も、実際ありますからね。日本人に対しては、結構尊敬の念を持ってくれている人もいますけれど。黒人の方と、肌の浅黒い人に対する差別はあります。(P) 「▲(社会を変えよう)とそういう事やり出すと、この国はやっぱり暗殺されるでしょうね。(S) 」
	4 さまざまな対処法	社会システムの違いなどに對他者の助けを得る・諦める・受け入れるという対処をすること	「フェイラ(=市場)だけは同胞と一緒に住みますね。(中略) 野菜の大きな束で売っているのも分けてこしたりとかできるので。段々便利なのでみんなで行くようになって。(F) 「▲日本ほどきつかったところははないと頭ではわかっていたので、ストレスになることはあんまりないです。(I☆)」
3 言語的困難	5 通じない不便さ	理解が困難ゆえに不自由を感じる	「言葉の問題が一番大きいですがね。(飛行機の運送など) 多分アナウンスされているんですけど、それがわからない。(O) 「(困るのは)言葉ですね。ポルトガル語の単語が少ないうえに。最初、イエスカノーになっちゃやう。スピードになっちゃやうから、反感持たれたりするときもありますよね。(S)」
	6 伝えるための努力	言語習得や意思疎通のために様々な努力をすること	「今は病院の受付で働かされていることも大体わかるので、言いたいことも調べて行けるんですけど、先生が何を言っているかわからないので、通訳さんに電話をして、そこで先生と電話でしゃべっててもらって、そのあと通訳さんに教えてもらうようにしています。(I) 「今、言語が全然できない状態になって、むしろジェスチャーの方がわかってもらえてる気がします。困った顔しているも、助けてくれたり。(F)」
4 ホストとの関わり	7 英語習得の必要性	子どもや自分のために英語に必要と感	「英語の方がまだまだいいですか。でもしゃべれないんですけど、最近ポルトガル語もやってみてみたいなと思っていて。(G) 「子どもの学校は、いまだに緊張しますね。わかんないと思って。(中略) ポルトガル語と英語(の勉強) ががんばるところです。(H)」
	8 ホストの良さに注目	日本人と比較して、ブラジル人の良さを感じる	「全部じゃないけど、ブラジル人はやさしい。簡潔、難しくもない。日本人みたいに。はっきりしているからその時分かんかしてそれで終わり。根に持たない。(R) 「(子ども) ちよっと離れて歩いていたりする、ああもう、お母さん! みたいな感じで声をかけられる。そこまでされるんですよ。親切に色々。公園の中とかで、息子が一人で走っている、ずつとみんを見つけてくれたりしますけどね。(K)」
	9 信用できなさ	ブラジル人は完全には信用できない。約束も当てにならないと感じること	「(指定した時間に来る人は、本当に朝くらいしかいないです。(Q) 「水道を直してほしいとか、依頼するじゃあないですか。で、来ないんですよ。1時間とか、2時間とか来ない、結局来なかったというのもあります。(P)」
	10 価値観・感覚の違い	日本人は異なる考え方やふるまいに困惑すること	「(ブラジル人は) エェスタ(=ハッピー)に誘われた時とか、用事があってもその日は行けないと言わない。逆に相手のことを考えて、うんわかった、いべいくと行って行かないとか。(M)」
	11 円滑な対応への工夫	考え方や価値観の違いがあることを受け入れ、自身の態度を表明しつつ円滑に対応しようとする	「はつきりと言って、本当に『わかった絶対やる』って相手に約束させるまでとことん言わないで(笑)。(P) 「まともには日本語を話さない。日本式の言い方に慣れてない彼ら(ホスト従業員) は辞めちゃうもの。(T) 「それがブラジルで、この人たちの価値観だから仕方がないと思わないと。私たちが押し付けでも押しつけられないし。日本人のそういう社会観念を。(S)」
5 同胞との関わり	12 同胞の良さに注目	同胞との付き合いは安堵感や、支援を得る場になる	「そこ(同胞との集まり)に行けば、日本語を話せるし、なんかそこに行けば、ポルトガル語の時の緊張感はないですね。(M)」
	13 付き合いにくさ	日本人の方が冷たい・何かと気を使う	「X市がどうこうというより、特殊な環境ですよ、何て言うんだらう、日本人の狭い付き合い。(H) 「日本人の方がこう言う言っちゃあやなんですよ、やはり、形の上で気を使わなければならないというはありますね。(J)」
6 国際結婚	14 お互いが異文化	お互いに理解する・あわせることが大事になる	「はくこの女性が(現地人)だから、全く日本人の発想を無理してもらえなかつたね。だから二つ一つです。どっちか合わないとうまくいかない。うちの場合は僕が合わせました。完璧に。専業主婦みたいなのは絶対ダメだね。とにかく黙って聞いてるんですよ。うーん、わかかった、わかかったって言って。(T)」
7 異文化での子育て	15 犯罪・誘拐に遭う不安	子どもを危険な目にあわせないために様々な心遣いをすること	「やっぱり誘拐とかもあるから、散歩に出る時間と、場所、ルートを覚えて散歩していただきますね。あと本場に私がキョロキョロして、家を一歩出たら、とにかく気が張りますね。子どもと一緒に。(L)」
	16 希薄な子どもの交友関係	子どもが母親の充実が母親の交友関係のストレスとなる	「子どもが馴染んでないと言っているのが、母親のストレス。どうなっちゃうんだらうとか、週末遊びに行く友達もいなくて、部屋で寝転がって、パソコンとかいじっている姿を見ていると、それはいやですよ。(他略) 外に出れないから。(H) 」
	17 異文化の子育てならではの配慮	ホスト国人や同国人の友人関係の充実のために親の配慮が必要となる	「(略) (ブラジル人の) 友達を誘ったんですよ。その子どもが明日(うちに)来ることになって、ちょっと今から緊張しているんですよ。(G) 「一時帰国で(日本に)帰ると、本来の姿を見ることがありますね。毎日友達と遊んで。(H☆)」

注 1.2.) 話者が対処をしていると判断した場合は、話者記号の後に星マーク (☆) で表示した。話者が「解決法はない」と語った言葉には、対極例として▲を付けて示してある。対極例を示すのも、M-GTA の特徴である。

親達は、インターナショナルスクールの先生や保護者、子どもの学校の友人達との会話の手段として、「子どもや自分のために英語も必要と感じ、習得しようとする」。現地語のほかに[英語習得の必要性]を感じており、英語が重要かつ比較的学習しやすい言語と捉えていた。

3.1.4 【ホストとの関わり】 ブラジル人は陽気で優しいと、[ホストの良さに注目]をしており「日本人と比較して、ブラジル人の良さを感じる」。一方で、「ブラジル人は完全には信用できない。約束も当てにならない」という、[信用できなさ]も抱いている。そしてブラジル人には[価値観・感覚の違い]を感じ、「日本人とは異なる考え方やふるまいに困惑すること」もある。[円満な対応への工夫]として、相手との「考え方や価値観の違いがあることを受け入れ、自身の態度を表明しつつ円満に対応しようとする」と考える。Fさんは、日頃の買い物の折など現地の店員とのやり取りから学んだこととして、Table IV-2 の具体例のように語っている。

3.1.5 【同胞との関わり】 「同胞との付き合いは、安堵感や、支援を得る場になる」という[同胞の良さに注目]した語りと、「日本人の方が冷たい・何かと気を使う」という[付き合いにくさ]に関する語りが得られ、受け止め方の差の反映と思われた。同胞の付き合いにくさに関する具体的対応策は語られなかった。

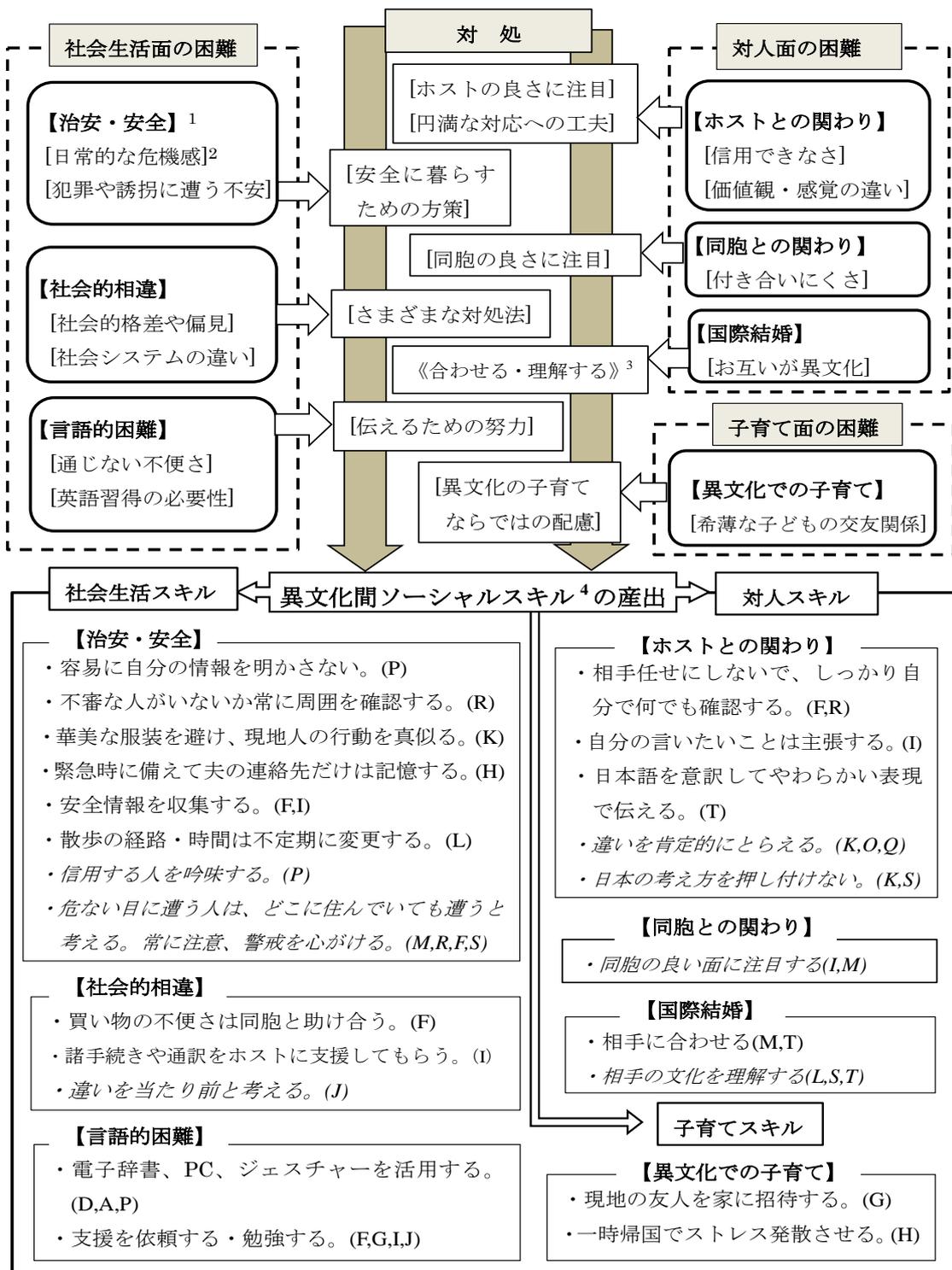
3.1.6 【国際結婚】 国際結婚は[お互いが異文化]であり、「お互いに理解する・あわせることが大事」となる。

3.1.7 【異文化での子育て】 [犯罪・誘拐に遭う不安]に関しては、特に「子どもを危険な目にあわせないために様々な心遣いをする」。子どものブラジル生活の充実が母親の関心事であり、子どもの希薄な交友関係が親のストレスになる。子どもにとって [希薄な交友関係]が、ブラジル生活を楽しめないという状態に直結する。[異文化の子育てならではの配慮]として、子どもの「ホスト国人や同国人の友人関係の充実のために親の配慮が必要」となり、それゆえに親がストレスを抱える場合がある。

第4節 総合考察

4.1 異文化間ソーシャルスキル

ソーシャルスキルは、通常人付き合いや社会生活に役立つ認知や行動の具体的な要領のことを意味しているが、今回は異文化滞在の困難に関する対処法から、異文化間ソーシャルスキルを産出した。ブラジル生活での困難と対処の分析結果図と、そこから導き出された異文化間ソーシャルスキルの一覧 (FigureIV-1) を示した。



FigureIV-1.ホスト環境における社会文化的な困難に対する異文化間ソーシャルスキル

注¹) 【】はカテゴリー、注²) []は概念、注³) 《》は定義の言葉をあらわす。

注⁴) カッコ内の記号は話者を示す。斜字は認知的スキル、斜字でないものは行動的スキル。

分析結果の【カテゴリー】は社会生活面、対人面、子育て面に分類し、スキルも同様に分けた。異文化間ソーシャルスキルは、語られた対処の中から産出した。スキルは、行動的と認知的のスキルがそれぞれまとめられた。異文化間ソーシャルスキルの主なカテゴリーは「社会生活スキル」と「対人スキル」である。「社会生活スキル」とは、治安状況や社会システムの相違など社会生活上の困難への対処から導き出したスキルであり、「対人スキル」は、ホストや同胞との対人関係に関わる困難の対処から産出した。ただしこれらと異質なものがわずかに見られ、それを「子育てスキル」とした。これは異文化生活での子育てのために講じるスキルで、子どもの対人関係が充実することを通して、本人のストレスが軽減されるという構図が想定されるため、スキルに数えた。なお、子どもの安全に関しては、家族全員の安全に含めて治安・安全のカテゴリーにまとめた。

今回の結果をみると、先行研究で示唆されたホスト国で安定的に適応が進むための要素（迫, 2015）が、具体的な行動や認知によるスキルとして明らかにされている。例えば「異文化に合わせた行動をする」は、「不審な人がいないか常に周囲を確認する」という行為として表現される。ただし「日本環境の保持」という要素だけは、今回認められていない。これは「ブラジル生活における困難」を尋ねたため、ブラジル環境に関わる答えが引き出されたことによると推測される。以下に社会生活スキル、対人スキル、子育てスキルの順に詳しくみていく。

4.1.1 社会生活スキル 社会生活に関わる困難体験は、【治安・安全】【社会的相違】【言語的困難】の3つが挙げられる。これらの困難体験に有効な対処法を、明確な認知や行動の形にして示せば、それらを社会生活スキルとしてみることができる。Furnham & Bochner（1986）が、英国で学ぶ留学生の社会的困難の調査において、医者への掛かり方などの社会生活の相違を挙げていたのに対し、ブラジルで行った本研究の調査では、治安や安全にかかわる社会不安がクローズアップされている。

【治安・安全】に関しては、全員が何らかの具体的な対処法を語っている。田村,三田, 栞野,渡会（2017）は、ブラジル各地に存在する貧民街（ファヴェーラ）と犯罪組織が、治安が悪いというイメージを人々に与えているとしている。またイメージだけではなく、Sam, et al.（2009）は、在伯韓国人が母国の韓国人と比べて精神健康度が低いことを示し、その理由として、犯罪に遭うまたは目撃する確率が高いためと述べている。したがってブラジルでは、安全に暮らすためサバイバルスキルへの関心が高い。「信用する人を吟味する」などの認知面による心構えと共に、具体的な行動的対処が語られた。今回の調査対象者の中で、20年以上の長期滞在者がいまだに困難を感じる体験として、治安や安全に関する事を挙げている。そしてその対処は、渡伯間もない滞在者とほとんど変わらず、自分の身は自分で気をつけて守るべきという姿勢を取っていた。近年は調査地域である X 市の治安が悪化していることから、以前より治安・安全に関心が高まっているとも考えられる。

【社会的な相違】日常生活における社会システムの違いに対しては、「違っていても当たり前」という考え方を持つことによって、違うことがストレスになることを防いでいた。そして少量の野菜を買えないなどの買い物の不便さは、同胞と分け合うなど具体的な対処の語りが得られた。

【言語的困難】への対処には、ホストや先住の同胞の支援が有用である。また、事前に会話の必要なフレーズを学習する、PC・ジェスチャーを使って相手に理解してもらおうとするなど自助努力の語りも少なくない。あきらめるといふ認知的対処は、直接的な問題解決には役立たなくても、本人の心理的安寧には役立っているという意味で、精神的健康維持の技能といえるかもしれない。

英語への関心は母親だけではなく、日系企業で働く日本人の中でも見られた。ホストの言語のみならず、英語は会社の標準言語となる場合があり、ホストとの媒介言語として注目されている。

なお言語の習得は、社会的場面での技能という意味で、对人的な対処法ではなく社会生活での対処に含めた。

4.1.2 対人スキル 対人関係に関わるカテゴリーは、【ホストとの関わり】【同胞との関わり】【国際結婚】の3つである。異文化滞在における対人関係については、田中（2010）が円満なホストとの対人関係を、稲村（1980）、鈴木（2012）らが同胞との付き合いに関わる留意点を指摘している。今回もホストと並んで同胞との付き合いが注目されていたことは、先行研究の結果と重なる。国際結婚のカテゴリーが分離されたが、これはパートナーとの関わりが一般的なホストとは異なるためである。

【ホストとの関わり】では、言わなくても分かってくれるだろうと期待してはいけないという語りが目立った。自分が不利益をこうむる場合には、ホスト言語が下手でもあきらめずに相手と交渉し続け、相手が実行するまで粘る、または見届けるといふ行動がとられている。例えばクリーニング屋に出した洋服は、絶対受取日に必要だと粘らないと、平気で後回しにされたりもする。主張することも時には必要で、それに対応するスキルが必要となる。また、直訳するときつい言い方になる日本語は、意識してやわらかい表現に変えて伝えている例が見られた。こうしたホストとの関係を良好に保つための工夫は、相手への配慮のスキルとみなせる。【ホストとの関わり】では、約束が必ずしも遵守されなくても、それを文化差と解釈することで、ホストとの付き合いがストレスにならないようにしていた。これらは、こころを落ち着かせる精神的健康のための技能と言えよう。【同胞との関わり】の難しさに関して行動的対処法は抽出されなかったが、良い面に注目することで納得や安定を得るとすれば、認知的対処となると考えられ、直接的な問題解決には少なくとも、感情面のコントロールには有用とみられている。

4.1.3 子育てスキル 【異文化での子育て】では、海外生活ならではの悩みが認められる。Ozeki & Mizuguchi (2007) は、ニューヨークで子育てをする日本人の母親 200 人の異文化ストレスとメンタルヘルスを調査した。その結果、半数以上の母親たちが海外での子育てはストレスと答えていた。子どもの生活に関心を寄せ、生活が充実していない子どもの姿にストレスを感じることは、今回の結果とよく似ている。叶 (2015) は、上海在住の日本人海外駐在員の妻のパーソナル・ネットワークを調べた。彼女たちは家庭内の責任を重視しており、子どもに安全な生活環境を提供しなければならないという意識を強く持っていた。そのために日本人同士のネットワークからの援助を重視していた。子どもの安全や安心に関する母親の意識の高さや、生活の充実のために同胞のネットワークを利用し、情報や支援を得ている点は、今回の結果と重なる。

しかし子どもの交友関係の充実は難しく、日本人の子ども自体が少ないために、そのつながりだけでは子どもの交友関係が充足させられないととらえられていた。安全面では同胞と協力し合うものの、子どもの対人関係という課題に対しては、同胞だけでなくホストとも積極的に関わり、そのネットワークを利用していた。一時帰国でリフレッシュし、英気を養うことも、ひとつの対応策となっていた。

4.2 ストレッサーに対する対処としての検討

海外生活上の困難によるストレスは、母国で生活するよりさらに多様な事情によって起こると鈴木 (2012) は述べている。そもそも海外生活は、本人のこれまで生活してきた環境と比べて、文化や生活様式、言語、対人関係などが異なる。しかもほぼ同時にいくつもの環境変化が起こるため、大きなストレスを感じるものと推測される。

今回ブラジル生活の困難体験への対処として、ストレスへの認知的対処法略とみなせるものがしばしば語られている。これらは直接問題解決には結びつかなくても、問題から離れたポジティブに受け止めたりして、困難の脅威度を下げている。このような対処は、異文化生活に関わらず、一般的なストレスの対処と重なる。日本健康心理学会 (2002) によると、一般的なストレス反応への対処は、(a) 問題解決的な対処、(b) 逃避、(c) 回避する対処、(d) ストレッサーに関する情報収集、(e) 他者への援助希求、(f) ストレッサーの肯定的な側面に注目する対処、(g) 気分転換などに区分される。(a) ~ (e) は行動的対処、(f)、(g) は認知的対処と言える。FigureIV-1 の異文化間ソーシャルスキルと照らし合わせてみたところ、(a) 問題解決的な対処は、今回見いだされた「自分の言いたいことは主張する」「買い物の不便さは同胞と助け合う」などのスキルが該当するだろう。同様に挙げていくなら、(b) 逃避は、「一時帰国でストレス発散させる」、(c) 回避する対処は、「華美な服装を避け、現地人の行動を真似る」と言える。(d) ストレッサーに関する情報収集は、「安全情報を収集する」、(e) 他者への援助希求は、「子育ての支援を依頼する」であろう。(f) ストレッサーの肯定的な側面に注目するという行為は、「違いを肯定

的にとらえる」に近いが、実際にストレス対処の効果があるかどうかは未確認である。(g) 気分転換は、「一時帰国でストレス発散させる」が当てはまるだろう。このように、今回示されたブラジル生活における困難対処のスキルは、一般的なストレス対処の分類に整理される面を持つが、具体的な内容は、ブラジルならではのものから成っており、そこに新たな意義がある。例えば、「相手任せにしないで、しっかり自分で何でも確認する」ことは必要な具体的スキルである。「華美な服装を避け、現地人の行動を真似る」というスキルも、治安が不安定な国において犯罪の標的にならないために有効な行動を現実的な行為として表現している。

一般的なストレス対処のカテゴリーに対応しないスキルとして、以下の二つが指摘できる。一つ目は、ホストが時間や約束にあまりこだわらないところに対して、文化や習慣、考え方の違いと考えて受け入れることである。二つ目は治安・安全に関して、自分の身は自分で守るという意識を持って、常に周囲に気を配る、自己開示を抑制する、自分のエリア内に他者を入れないなど、徹底した細かい日常の配慮をすることである。この二点は、一般的なストレス対処の研究がカバーしてこなかった、異文化の環境や文脈への対応という、社会文化的適応に焦点を合わせたスキルである。こうした特徴が FigureIV-1 に総括されている。ブラジル滞在者における困難の実際を詳細にみた本研究で、明確化された概念といえる。

4.3 ブラジルにおける異文化間ソーシャルスキル学習の可能性

上記で提案した異文化間ソーシャルスキルの情報は、どのように活用できるだろうか。Ward, Bochner & Furnham (2005) は、異文化滞在の困難対処資源として、現地に関する知識と、ソーシャルスキルの獲得を挙げ、認知的情動的なアプローチを体系的に組み合わせた行動練習が最も効果的と述べている。今回は、現地情報を収集することや、ブラジルの社会的な特徴への対応や、考え方が異なるホストとの付き合いの要領を、異文化間ソーシャルスキルとして抽出した。次の段階として、それを学ぶスキル学習を考えていきたい。田中 (2010) は、異文化滞在で必要となるソーシャルスキルの学習について、物の見方や考え方の要領、自分の気持ちを制御する感情面のスキルを含めた認知的スキルと、振舞い方や言い回しなどの行動的スキルの二つをあげて説明している。振る舞い方などの行動的な学習と、判断の仕方や考え方を身に付ける認知的学習を合わせて渡航前に学び、滞在時に活用することで異文化適応に役立つとしている。多様な社会・異文化の中で精神的健康を維持しながら適応的に生活するためには、それぞれの文化特有のパターン、社会行動の知識を持ち、行動の評価の仕方を知り、対処のパターンを幅広く習得しておくことが有用となる。

本稿では、ホスト国の環境や社会的特徴、つまり社会文化的文脈に起因する外的要因に注目し、その対処から異文化間ソーシャルスキルの抽出を目指した。社会生活のスキルと

対人関係のスキルが示されたが、過去の研究では両者を網羅して特定の社会の異文化滞在者のための具体的スキルを抽出した例はない。またブラジルの社会と文化への注目も、在伯日本人を対象者とした心理学研究も非常に少ないため、文化特異的な情報的価値に加えて、異文化圏での社会生活と対人関係の両面にわたるスキル研究の先行例としての意味がある。

実体験に基づく情報から具体的な場面設定や対処法を示していけば、異文化間ソーシャルスキル学習に活用できる。今後はスキルのリストをもとに、心理教育的セッションを組み立てていくことで、教育心理的な発想による応用の可能性が開けていくと考えられる。

本章では、ブラジルにおける対人関係として、ホストや同胞との関係に言及してきた。しかし、ブラジルには多くの日系人が生活しており、彼らとの関係性についても詳しく検討する必要がある。第3章では、日系人について在伯日本人留学生から、支援や癒しを得ることができる存在として、肯定的な語りが得られている。しかし、永住予定の在伯日本人を対象とした迫（2015）の研究では、日系人は優れた適応支援者である反面、在伯日本人にとって付き合いに困難を感じストレス源にもなりうると述べている。留学生らが日系人を肯定的存在ととらえるのに対し、なぜ永住日本人は、日系人を支援源と、ストレス源の両方の価値、すなわち両価性があると認知するのだろうか。日系人に両価性があるとみるなら、どうしたら肯定的な関係を築けるのか。次章では、その読み解きをすべく、在伯日本人と日系人の両価的な関係性に焦点を当てていく。

第5章 日系人との両価的關係性

第1節 研究の背景と目的

迫（2015）の先行研究では、ブラジル永住予定の在伯日本人にとって、日系人は言語や文化の共通性を持った人々として受け止められ、そこに安心感や親しみを覚えていること、社会文化的な支援源として重視されていることが報告されている。だがその中には日系人がストレスになると語るケースもあった。どうしたらうまく付き合っていけるのかは、未解明である。鈴木（2012）は北南米には日系人社会の生活全般にわたる相互扶助の歴史があると紹介している。それゆえ在外邦人への支援機能もより強靱と説明されているが、何がどう支援されるのか具体的には示されていない。安定的な適応にホストや同胞との対人関係が密接に関わることは、これまでの先行研究で明らかになってきているが、在外日本人と日系人との対人関係に焦点をあてた心理学研究はブラジル以外でも見当たらない。日系人には支援源とストレス源という両価性があるとみるなら、まず在伯日本人にとってどのような存在なのか、どう接したら適応に資する肯定的な関係を築けるのか、そして両価性の背景にある機序はどうなっているのか、そこを読み解くことができれば、在留邦人の海外生活における異文化適応に資する示唆が得られるだろう。

本章では、在伯日本人と日系人との関係の両価性を読みとくとき、肯定的な関係形成への示唆を得ることとする。具体的には日系人の心理的機能として、サポート源など肯定的側面と、ストレス源となる否定的な側面を把握し、その切り替えや分岐の機序を読み解くことを目的とする。在伯日本人の異文化適応の支援源として期待される日系人とは、どのような関係が持てたら適応の助けとなるのかを、検証していく。

1.1 研究上の問い

研究上の問いは、以下の3点である。

- RQ1：在伯日本人は、日系人をどのように認識しているのか。日系人への認識を探る。
- RQ2：どのような時に日系人がストレス源、サポート源になるのか。両価性の分岐を読み解く。
- RQ3：ストレスでなく支援が得られるような日系人との肯定的関係は、どうしたら構築できるか。実生活への応用を視野に入れて検討する。

これらの探索のため、調査協力者には、まずブラジル滞在における困難とその対処を尋ねる。日系人との関係について、何らかのエピソードが出された場合はそのまま語ってもらい、エピソードが自発的に出ない場合は、調査者の方から尋ねた。そして、研究上の問いの答えにつながる、日系人に関しての語りをもとに、両価性をめぐる揺らぎについて検討し、仮説の生成を試みる。そして応用への示唆を探る。

このように日系人との関係性における心理的機能を明らかにしていくことは、増えつつある海外邦人が、精神的健康を維持して異文化適応を果たすという今日的な課題に対し、現地の日系人とどう関わっていけばよいのかという問いへの手がかりを提供する意義があると思われる。

第2節 方法

2.1 調査協力者

調査協力者はブラジル X 市に居住する日本人 19 人 (Table V-1、Table V-2) である。Table V-2 の数字は、人数。() 内は%を表している。第一筆者の知人である在伯日本人に協力を得てスノーボールテクニックによって依頼していった。

Table V-1. 調査協力者一覧 (ほぼ在伯年数順)

記号	性別	年令	在伯年数	職業など ¹⁾	滞在目的 ²⁾	帰国予定	同居家族 ³⁾	ポルトガル語 ⁴⁾
A	女	20代	4ヶ月	学生	留学	あり	◎ホスト家族・韓国人留学生・Bさん	2
B	女	20代	4ヶ月	学生	留学	あり	◎ホスト家族・韓国人留学生・Aさん	2
C	女	20代	3ヶ月	学生	留学	あり	○日系のホスト家族	2
D	女	20代	4ヶ月	学生	留学	あり	○ホスト家族	2
E	男	30代	5ヶ月	会社員	留学	あり	◎ドイツ系のホスト家族	2
F	女	40代	3ヶ月	主婦	帯同	あり	日本人夫	1
G	女	30代	1年2ヶ月	主婦	帯同	あり	日本人夫・子ども	1
H	女	40代	1年3ヶ月	主婦	帯同	あり	日本人夫・子ども	1
I	女	30代	1年6ヶ月	主婦	帯同	あり	日本人夫・幼児	1
J	男	50代	2年1ヶ月	会社員	赴任	あり	なし(単身赴任)	2
K	女	30代	2年7ヶ月	主婦	帯同	あり	日本人夫・幼児	2
L	女	30代	3年6ヶ月	会社員	結婚	未定	◎ブラジル人夫・子ども・幼児	3
M	女	30代	4年4ヶ月	主婦	結婚	なし	◎ブラジル人夫・幼児	2
O	女	50代	6年6ヶ月	主婦	帯同	あり	日本人夫	2
P	男	40代	10年	会社員	結婚	なし	○ブラジル人妻	3
Q	男	30代	10年1ヶ月	自営業	就労	なし	なし(独身)	3
R	女	40代	19年5ヶ月	会社員	就労	なし	◎ブラジル人夫・子ども	3
S	女	60代	25年	自営業	就労	未定	日本人夫	3
T	男	50代	30年	会社員	就労	なし	○ブラジル人妻	3

注¹⁾ 「会社員」は、会社組織の就労者。「自営業」は、店舗など個人で仕事を運営している人。

注²⁾ 「帯同」とは、海外赴任者の妻。「赴任」とは海外赴任の就労者。「就労」は自営業や現地採用の就労者。

「結婚」は国際結婚。

注³⁾ ホストと同居している者の家庭内言語環境。○はホスト語のみ。◎はホスト語および日本語。ここでいう「子ども」は小学生～高校生、「幼児」は未就学児をさす。

注⁴⁾ 自己判定によるポルトガル語レベル: 1.日常会話も難しい、2.日常会話程度、3.あらゆる場面で使える。

Table V -2. 調査協力者の概要

性別	在伯期間	職業	年齢	帰国予定
男性 5(26.3)	1年未満 6(31.6)	自営 2(10.5)	20代 4(21.1)	ある 12(63.2)
女性 14(73.7)	1~5年 7(36.8)	会社員 5(26.3)	30代 7(36.8)	ない 5(26.3)
	6~10年 3(15.8)	主婦 7(36.8)	40代 4(21.1)	未定 2(10.5)
	11~20年 1(5.3)	学生 ₁ 5(26.3)	50代 3(15.8)	
	20~30年 2(10.5)		60代 1(5.3)	

注₁: 現地の大学や、語学学校に通う目的で在伯している人

2.2 調査地

調査地は、第 2~4 章と同様である。

2.3 調査の手続き

調査の手続きは、第 4 章と同様である。

第 3 節 結果と考察

調査協力者の語りは、M-GTA の手法に則り、ワークシートを作成し、適時概念、定義、具体例、理論的メモを記入していきながら分析した。M-GTA の具体的な手法は、第 4 章で述べたとおりである。本稿では、日系人との関わりを検討するため、分析の結果得られたカテゴリーのうち、《日系人のとらえ方》のみを抜き出し【概念】と[定義]、具体例の一部を加えて Table V-3 に示す。表中の鍵となるエピソードには下線を引いた。

本章の調査対象者は、第 3、4 章と同じであるが、N さんは対象から除いた。N さんの面接中に近隣の道路でデモが発生し、危険を回避するために日系人に関わる語りが得られる前に調査を中止したからである。残り 19 人の調査協力者のうち、A さんのみ日系人と接触がなく、今回の焦点に関連する語りはなかったが、その他の 18 人からは、日系人についての語りが得られた。接触の度合いは、たまに挨拶を交わす程度の人から、毎日仕事で関わりを持つ人まで様々であった。カテゴリー《日系人のとらえ方》の【概念】は 6 項目であった。

以下に《日系人のとらえ方》の【概念】や[定義]を含め、簡潔に文章化したストーリーラインを示す。ストーリーライン内の【】は概念、[]は定義を意味する。具体例は、実際の語りを抜き出して示した。語りの末尾には話者の仮称であるアルファベットを記した。

3.1 ストーリーライン

在伯日本人は、[世代や育ち方によって、日系人を独自に分類]して理解をしようとする。つまり、【日系人に下位分類をもうける】ことで多様な日系人を日本人に近い、またはブ

ラジル人に近いなどのタイプに分ける。

Table V-3. 《日系人のとらえ方》の詳細

《カテゴリー》	【概念】	【定義】	具体例の一部
日系人と の関わり	1 日系人に下位 分類をもうける	世代や育ち方によって、 日系人を独自に分類す る	「二世なんですけどその子が。すごい日本人ばくて。だから私の中で日本人寄りな感覚 で付き合っています。3世とか4世とかだと、ブラジル人と言う感じで。(D)」 「同じ日系 の人であっても、こちらで生まれ育った方と、小さいころ生まれてすぐに日本に行って 育った人では全く違いますからね。(P)」 「二世でも二つの種類があると思うんですね、 たとえば、両親が、戦前に来て4,5年後に(生まれた人)は、本当にすごい日本人に近い 考え方を持っている。あとはこちらで成長した一世から生まれた二世の人は、もっとな んていうかブラジル化していますよね。(S)」
	2 共通点と相違点 をみつけ、好感 をもつ	日本人にはない良さや 日本人と似ている点の いずれも肯定的にとら える。	「日本人とは違うなと感じることはすごくあります。やっぱり、日系の方が、 <u>明るい</u> 人が多いかなと思います。(B)」 「 <u>朗らかなのと、笑顔がすごいアペルタな(大きい) 気</u> <u>がする。臆病さがなく、優しい。</u> 日本人だと、おせっかいと思ってしまうような 優しさを、してくる。(C)」 「 <u>コミュニケーションの取り方がはっきりしている。</u> はっき り物事を言うし、 <u>遠慮とかはしない。</u> わかりやすく表現しますね。その辺りが、総じて 日本人とは違うなと思いますね。(F)」 「日系人の方はとても、 <u>古い時代の日本の常識的なもの</u> を持ってらっしゃるから。遠慮 深いし、謙遜しているっていうかな。とっても、いい感じですね。(O)」 「最初に、僕、 日系なんだよって話しかけて友達になってくれて。それはすごいうれしかったです。マ ンガとかで共通の <u>知っているものがある</u> と盛り上がったりとかして。(D)」 「日系人、基 本的に私はブラジル人だと思っているんですね。でも、ブラジル人にはない、 <u>よりル ールを守ろうと言う姿勢がある。</u> (E)」
	3 二文化性への 配慮を要する	日本性と異文化性を 持つ日系人と付き合う ために気遣いをする	「日本語でやり取りしていても、 <u>外国人と話している感覚で思考回路が動いているの</u> <u>かなと感じます。</u> 計りかねましたね。 <u>言うの本気にされちゃうかも、みたいな。</u> (F)」 「 <u>やっぱりその人たちが育った環境によって、話し言葉を変えないといけない</u> ですね。 (S)」 「 <u>日系人の人は生活のレベルが、ちょっと違う</u> じゃないですか。駐在の日本人と。 一緒にご飯食べる時も、お店を選んだりとかするかな。(K)」 「 <u>ちょっと日本人のことが</u> <u>わかる。</u> でも9割方考え方がブラジルだから、そのまま直訳すると怒っちゃうのね。 (T)」 「 <u>日本語でしゃべりたい人もいるから。</u> そういう人とは日本語で話すし。(R)」
	4 支援してくれる 存在と感じる	日系人を支援を頼め る存在と認識し、あ りがたいと感じる	「(日系の) タクシー運転手さんがすごくいい人です。ポル語しかしゃべれない歯医者 とのコミュニケーションを、 <u>通訳してくれて、</u> すごくありがたくて、すごくいい人 です。(G)」 「 <u>結構日系人の方で日本語しゃべれる方が、私の身の回りにいっぱいいるの</u> <u>で、手伝ってもらったり助けてもらったりして、本当に良かったな</u> と思います。(B)」
	5 気楽な存在と 感じる	プライベートなら気楽 に付き合える。また、 同胞との付き合いより は、日系人の方がつき 合いやすいと考える。	「(日本人には) <u>気を使うんですけど、日系ブラジル人の方だと、そんなに気を使わな</u> <u>い</u> で接することができるんです。敬語とか、 <u>使わないで話せますし。</u> (D)」 「日系人の 方が <u>フランクに付き合えます</u> よね。日本人の方が、形の上で気を使わなけりゃいけない というのはありますね。(J)」 「 <u>日本人の方相手にはものすごく気を使うんです。</u> ちゃん とお礼はすぐしなきゃとかね。でも日系の方は、 <u>まあいいのかな</u> と思って(笑)。(H)」 「 <u>日本語でしゃべれるのがうれしい</u> と言ってきて。だからあまり気は使わないな。 (I)」 「 <u>私の知り合い、お友達は、日本に近い</u> というか、 <u>日本が好き</u> な日系の人たちだ から。だから日本人とおなじ感じで接していますね。(M)」 「 <u>仕事の時は、あれで(気 を使うけど) プライベートの時は日系人がいても関係ない</u> ですかね。(Q)」 「 <u>プライベート では違いますが。プライベートではまあ、(お金の) 話をする</u> ことはあります。 <u>仕事 が絡んでいないので、利害関係ない</u> ですからね。(P)」
	6 ストレスを受け る存在と感じる	相手の考え方にあわせ ようと気を使い、戸惑 いやストレスを感じな がらつき合う	「日系の人はすごい距離を取りにくい。中途半端に、 <u>なんか和の要素</u> を持っている。 (L)」 「 <u>日系の方とお話するときは日本に何を期待しているんだろう</u> みたいなことを私 は意識的に考えをめぐらしますね。(L)」 「 <u>日系人は、どっか、やっぱり日本人</u> と言う ものは <u>こうあるべき</u> だ見たいなのを、みんなが考えている。(Q)」 「 <u>最初は溶け込もう と付き合っていたんですけど、やっぱり、だんだん疲れてきて。</u> もうなんか <u>さっさと帰 りたい。</u> カルチャー、文化の差。(H)」

そして日本人との【共通点や相違点を見つけ、好感をもつ】。しかし、[日本人にはない良さや日本人と似ている点のいずれも肯定的にとらえる]ことができればよいが、[日本性と異文化性を持つ日系人と付き合うために気遣いをする]場合もある。そして彼らと円満に付き合うには、彼らの【二文化性への配慮を要する】と感じる。このように日系人の二文化性に対する考え方が、彼らのとらえ方に影響を与える。

日系人のとらえ方は3つに分けられる。まず一つ目は日系人を【支援してくれる存在と感じる】。特に言語社会的に自立が難しく支援ニーズが高い場合は、彼らの二文化性を肯定的にとらえて [日系人は支援を頼める存在と認識し、ありがたいと感じる]。二つ目は日系人を【気楽な存在と感じる】。礼儀や贈り物のやり取りなどが生ずる[同胞との付き合いよりは、日系人の方が付き合いやすいと考える]。それ以外にも、気が合う日系人と、つき合う頻度を調節しながら付き合うことができる場合、すなわち[プライベートなら気楽に付き合える]と感じる。このように、同胞よりも日系人の異文化性に好感を覚える場合や、個人レベルで気の合う日系人と選択的に付き合える場合は、日系人を肯定的にとらえていた。

三つ目のとらえ方は、日系人を【ストレスを受ける存在と感じる】である。付き合う相手や距離を調節することが出来ないと、[相手の考え方にあわせようと気を使い、戸惑いや、ストレスを感じながらつきあう]ことになり、うまくいかない場合には否定的な認識を持つようになる。

Figure V-1 は、ストーリーラインの内容の図式化を試みた。さらに特徴として現れてきた、“日系人のとらえ方の変動”と、“日系人の異文化性と日本性”について、以下に述べていく。

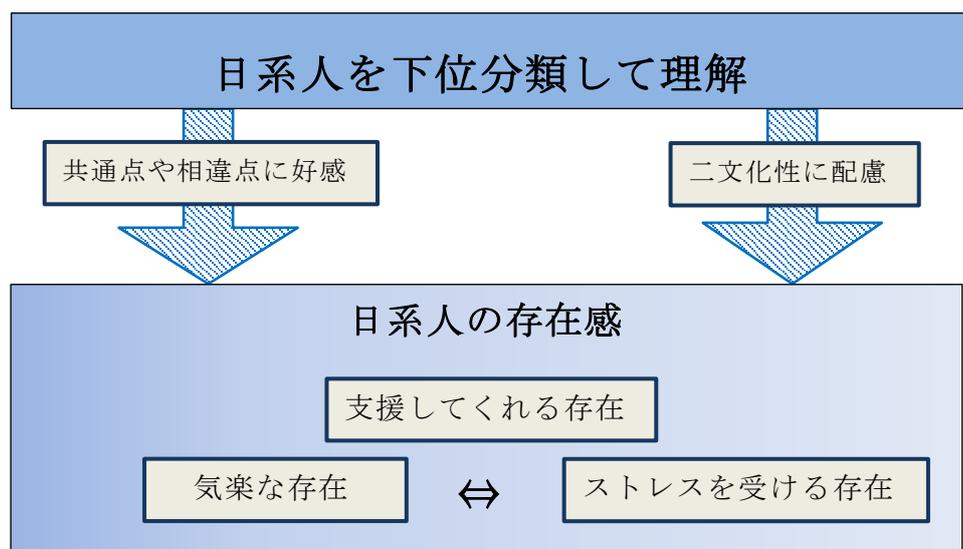


Figure V-1. 日系人のとらえ方の結果図

3.2 日系人のとらえ方の変動

Hさん（女性、40代、在伯1年3ヵ月）は、日系人との付き合いについて「最初は溶け込もうと付き合っていたんですけど、やっぱり、だんだん疲れてきて。もうなんかさっと帰りたい。カルチャー、文化の差。(H)」と、ストレスを感じていた。しかし、日系人同士のフランクな付き合い方を真似て、無理に付き合うやり方を改め、距離を置いたところ、日本人との付き合いに比べて日系人の方が気楽に感じるようになった。つまり日系人に対するとらえ方は固定ではなく、自分が認知的にも行動的にも距離を置いたら、相手の存在がストレスではなくなり、気楽な存在に変化させることができた。

Qさん（男性、30代、在伯10年1ヶ月）、Pさん（男性、40代、在伯10年）は、仕事上での日系人との付き合いの難しさを語った後で「仕事の時は、あれで（気を使うけど）、プライベートの時は日系人がいても関係ないですかね。(Q)」「プライベートでは違いますよ。(P)」と語った。付き合う相手の選択や距離の調節が可能なプライベート場面と、職場や家庭のように相手を避けられない場合とで、日系人のとらえ方は異なっていた。

3.3 日系人の異文化性と日本性

日系人の異文化性に関しては、日本人にはない良さとして肯定的に語られることが多い。あいさつの仕方をブラジル式に合わせる、誤解のないように意識する時は言葉を選ぶなど、付き合い方の心得として配慮を要するが、ストレスになるという語りはみられなかった。

だが、日系人の日本性については、共通性を見出して親しみをもつ反面、現代の日本人と彼らの日本性との間の「ズレ」に困惑を感じていた。「日系人の方は、とても古い時代の日本の常識的なものを持ってらっしゃる(O)」「中途半端に和の要素を持っている(L)」というOさん（女性、50代、在伯6年6ヶ月）、Lさん（女性、30代、在伯3年6ヶ月）の語りからは、日系人は日本性を持ちながらも、現代の日本人とは異なると感じていることがうかがえる。また、「日本人に何を期待しているんだろうみたいな(L)」。「どっかやっぱり、日本人というものはこうあるべきみたいなのを、みんなが考えている(Q)」という語りからは、彼らのイメージする日本人像にあわせてふるまうことを期待されている、と感じていることがわかる。

「日系人の日本人観」に関しては、人類学者の前山（2009）が以下のように述べている。ブラジルに移住した日本人は、日常のふるまいや個人的言動が各々に帰属されず、他国の移民やブラジル国人から「日本人の振る舞い」と理解されるため、「日本人らしく振舞う」ように努めることとなった。歴史学者のJeffery（2016）によると、日系人は、日本人すなわち「誠実で勤勉」であり、非日系のブラジル人は「不誠実で怠惰」だからそれより優れている、という古い観念がブラジル大衆文化の中に入り込んでいるという。北米の日系人研究では、自身が日系であることを隠そうとしたり、地域住民から否定的にとらえられるケースが見られる（日本移民学会、2018）が、ブラジルでは「日本人であること」に一定

の評価がある。田村ら（2017）によると、ブラジルは第二次世界大戦後、復興と高度成長を遂げた日本に対する関心が高く、日本人移民が維持してきた「日本文化」に対しても肯定的な評価があると述べている。日本文化の保持は、日系人にとって誇りであり、価値あることとして、とらえられている。しかしながら彼らの日本人観は、両親などから見聞きした古い時代の日本人像に基づく。今日の日本人にとっての自然な振る舞いは、日系人からみて必ずしも「日本人らしい」とは感じられず、そこに「ズレ」が予想されることになる。これが互いのストレスに繋がっていくと推測される。

日系人の二文化性については、文化人類学者の斉藤（1984）、前山（2001）が、日系2、3、4世と世代が進むにしたがって、ホスト文化が優勢になっていくことを指摘しているが、同じ世代間でも個人差があるとも述べている。したがって彼らが自らのアイデンティティを「ブラジル人」あるいは「日本人」と捉えているのか、どちらでもない「日系人」として差別化を図っているのか、それによって、ニューカマーである日本人を同胞と見るか、自分とは異なる人種と見るか、そのまなざしも変わることを理解しておく必要がある。

また、日系人の二文化性がすなわち日系文化と考えるならば、今後のブラジルにおける文化変容研究において考慮すべき文化は複数あると考えるべきだろう。第2章において文化変容態度に焦点を当てた今回の調査では、ホストと、エスニックの二つの軸の文化変容を分析した。このエスニックの中には、日本文化とともに日系人が保持し続けている「母文化」を含めている。しかし在伯日本人にとっては、ホスト文化の他に日系文化も適応が必要な文化と感じている可能性がある。今後はブラジル文化の多重性について考慮する必要があるだろう。

第4節 総合考察

リサーチクエスションへの答えをまとめると、以下のようになる。

日系人に対するとらえ方および彼らへの認識（RQ1）については、以下2点が読み取れる。

①日系人は、言語社会的なサポートをしてくれる存在として、認識されている。②日系人は、日本の言語や文化を共有するという日本性と、ブラジル文化に馴染んだ明るく大らかという異文化性の、二文化を持つ存在として、認識されている。

どのような時にストレス源またはサポート源になりうるのか（RQ2）に関しては、両価値の分岐が以下の3点に認められる。①言語社会的支援ニーズが高い時には、サポート源になる。②支援ニーズが薄れると、サポート提供の機能は薄れる。このとき、日系人の二文化性を好ましく感じている場合、あるいは否定的な要素が混在していたとしても、付き合い方が自由に調整できるときには、日系人は肯定的な存在となりうる。付き合い方の選択の自由に関しては、上海在住海外駐在員の日本人妻のパーソナル・ネットワークについて、叶（2015）が以下のように報告している。滞在国での日本人同士のネットワークが、妻らのストレスの原因になっているという先行研究の例を挙げながら、叶の調査において

は全くストレスになっていないことを報告し、その理由として、付き合う友人が自由に選択できているからだと結論付けている。つまり相手を選べるなら、同胞の付き合いも気楽なものにできる。この選択の自由度に関する見方は、今回の日系人との関係にも当てはまるだろう。

両価性の分岐の③は、日系人の二文化性に合わせるための努力や気遣いの必要性を感じて配慮に努めるが、それがうまくいかないときや、つき合う相手や頻度などを自由に選択できないままその困難感と向き合い続けねばならないときに現れる。そして日系人のことを、ストレスをもたらす否定的な存在と感じる。日本人に対する日本的な振る舞いへの期待を重荷に思うと、ことに困惑が生じる。

ストレス源ではなく、異文化適応に資する関係はどうしたらできるか (RQ3) に関しては、良好な関係形成に向かうための示唆として、次の二点が考えられる。①言語社会的支援ニーズが高い場合は、それを満たすことが優先されるので、ストレスを意識することは希薄である。②二文化性を持つという日系人の特質と価値観を理解し、可能な範囲で合わせる、または距離を置くなどの調整をすると、ストレス源となる可能性を減少させることが出来る。このように相手の特質を理解する、可能な限り相手に合わせる、距離を調節することが、日系人との良好な関係形成のためのソーシャルスキルと言える。

Ting-toomey & Hotta (2013) は在米留学生 20 人 (日本人を含む) を対象とした異文化適応研究において、留学生らは米国文化に適応するために、ホストに合わせてコミュニケーション態度を変える必要があると述べている。ホスト国の考え方や習慣に配慮しながら、相手によってコミュニケーション態度を変えるという行動的スキルが、今回もみられた。日系人の持つ日本性と異文化性を理解しながら、両方の好ましい部分に注目するという認知的スキルの活用が望まれる。

日系人との関わりとその心理的機能に関する読み解きを総合するなら、次のような三要素モデル (Figure V-2) として表現できよう。基盤となるのは自立性 (言語社会的支援ニーズ) であろう。まずこの点が満たされるか否か、次に社会的な周辺環境が (関係選択) を許すかどうか、そして最後に自分の価値がいずれの文化を好むか (集団選好)、という三点において、日系人の存在感は分岐していくと考えられる。ただし社会的に自立し、高い言語レベルを得たのちの在伯日本人において、たとえ支援ニーズが薄れても日系人との関係が一樣にストレスに変わるわけではない。そこでは関係選択の可能性と集団選好の方向次第で、ポジティブな関係でいられるかが分岐するといえる。

日系人に対するとらえ方は固定的ではない。関係性の調節や認知の転換などの諸条件によって、ストレスとなる存在にも、気楽な存在にもなり得る。日系人の異文化性と日本性に効果的な対応ができたなら、良好な関係性という評価に繋がりやすくなると考えられる。

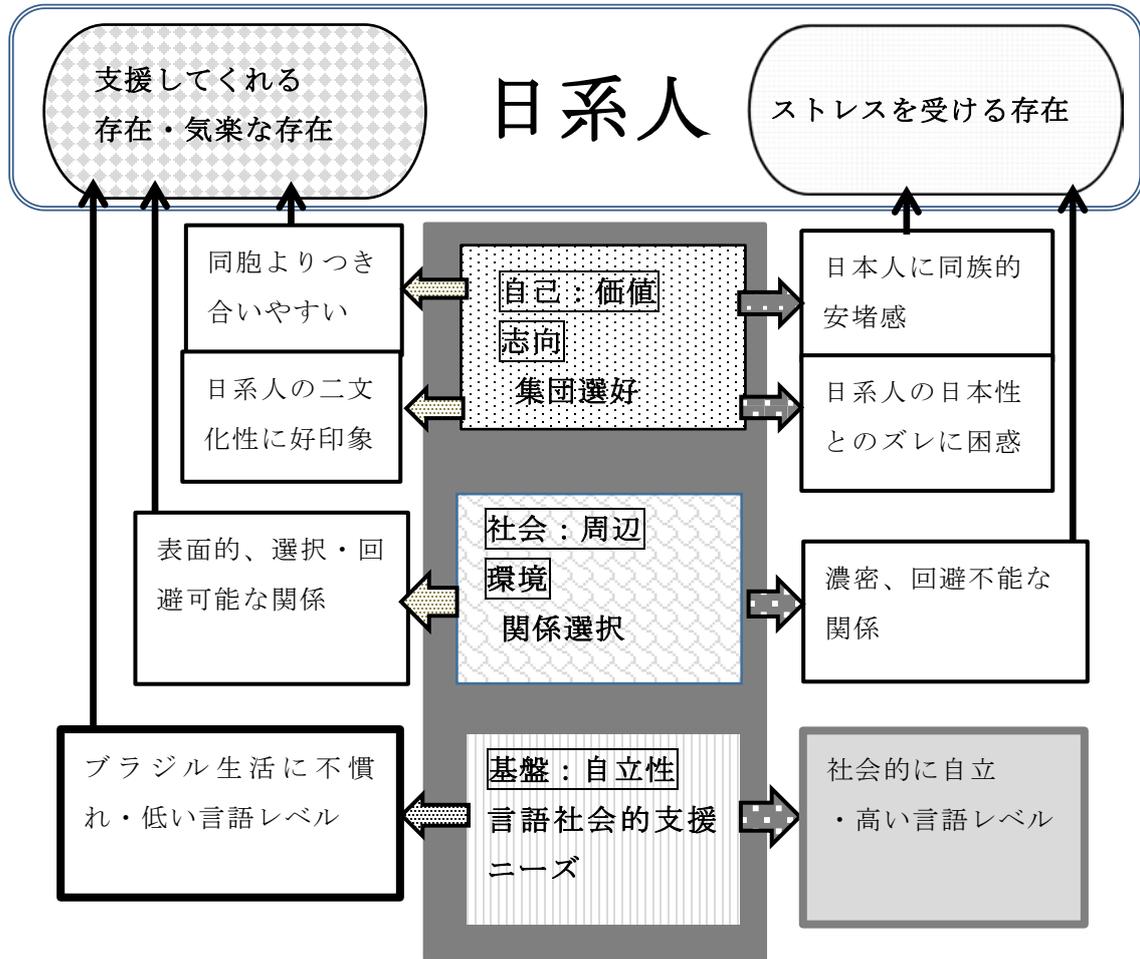


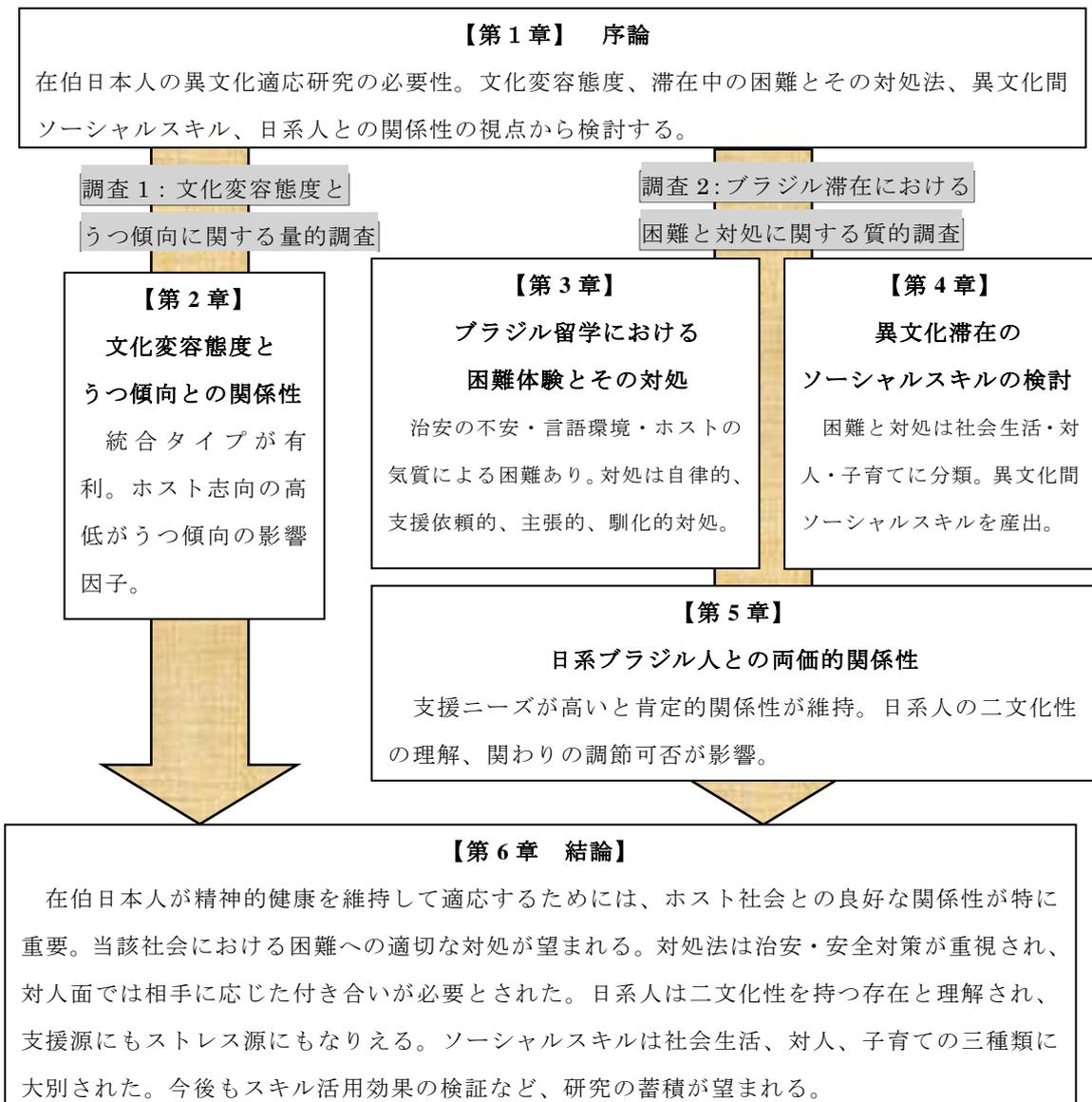
Figure V-2. 言語社会的支援ニーズ、関係選択、集団選好による
日系心理的機能の三要素モデル

日系人の二文化性に対しては、好意的に受け止められる部分に注目し、考え方や価値観の違いには適切に配慮をすることで、彼等との関係がストレスにならず肯定的関係が構築できる可能性を高め、良き支援者を得ることに繋がる。滞在先の日系人とのつき合い方に関する示唆を見出したことは、今後渡伯する日本人にとって有用な成果といえよう。

第6章 結論

第1節 本研究で得られた知見のまとめ

本稿では在伯日本人の異文化適応について、文化変容と精神的健康、および滞在時の困難と対処、そして日系人との関係性の観点から論じてきた。本章では、研究の総括を行う。まず、研究の流れに沿って知見をまとめ、今回得られた示唆を整理したい。序章における「Figure I -1 研究の全体像（1）」に対応して、それぞれの章で得られた知見を簡潔に書き加えた「FigureVI-1 研究の全体像（2）」を以下に示した。



FigureVI-1 研究の全体像（2）

序章では、研究の背景として、日本人を対象とした異文化適応研究のフィールドの広がり求められると説明した。南米ブラジルは、長期滞在者が増加傾向にあるが日本人を対象とした先行研究が少ないため、今後渡伯する日本人の円滑な適応に資する、ブラジルでの異文化適応研究の必要性を指摘した。そして本研究の目的を、在伯日本人が異文化適応するための探索的研究を行うこととし、文化変容態度と精神的健康、ブラジル滞在時の困難と対処、日系人との関係性の3つの観点から検証を行った。

まず日本人が慣れない海外生活により精神的健康を損ないやすいことから、在伯日本人の文化変容態度とうつの関係性を、量的手法の質問紙調査によって探索した。質問紙調査の分析は第2章で検討された。その結果、諸外国における先行研究の結果と同様に、文化変容態度の統合タイプの個人が、分離タイプおよび周辺化タイプの個人と比べて有意にうつ傾向が低いことが示された。在伯日本人においてはホスト志向の高低がうつの影響因子ということが示され、ホストの社会文化に上手く馴染むことが精神的健康の維持には重要と考えられた。

精神的健康を維持してブラジルに適応するためには、ホスト社会文化との関係性が重要になることから、その関係性が良好であるために具体的にどうしたら良いかについて、詳細に見ていく必要がある。そのためには、具体的な情報を得ることが出来る聞き取り調査がふさわしいと考え、次は在伯日本人対象に、ブラジル生活で感じる困難とその対処について質的手法による探索を行った。

まず第3章では滞在期間が短い日本人留学生に焦点を当て検討した。彼らの具体的な困難としては、治安や安全面の不安、ホストの気質、言語面の困難があることが示された。これらの困難を克服するために、彼らは、馴れる、合わせるといった馴化的対処のほか、自律的、支援依頼的、主張的対処をしていた。ホストや同胞に加えて、日系人との対人ネットワークを活用し、どのようなサポートを得ているかを描き出した本研究からは、従来の日本人留学生の異文化適応研究にはない知見が得られたと考えられる。

留学生における困難とその対処がまとめられた後は、調査対象者の範囲を広げ、様々な理由で長期滞在する日本人を対象に、同様の検討を行った。第4章でその結果が示されており、治安や言語面・社会的相違などの社会生活面の困難と、ホストや同胞など対人面の困難、異文化での子育てによる困難がみられることが明らかになった。そしてその対処に関わる具体的な語りの中から、有用と思われる社会生活および対人面でのソーシャルスキルが産出された。スキルには、常に周囲に気を配る、自己開示を抑制するなど、ブラジルでの困難対処ならではのと思われるものが含まれた。

対人面では、日系人に関する語りも多数得られた。日系人は支援してもらえるとという肯定的な捉えとストレスになるという否定的な捉えがあり、在伯日本人にとって日系人は、支援源とストレス源の両価性を持つと考えられた。第5章では、その肯定的側面と否定的側面を把握し、その分岐の機序と、肯定的な関係性維持のための示唆を探索した。その結

果、日系人は、日本人の言語社会的支援ニーズが高いときには、よき支援者と受け止められるが、支援ニーズが減った後は、その存在が、肯定的または否定的存在に分岐すると思われた。彼らの持つ日本文化とブラジル文化の二文化性を理解し、付き合い方を調節することで肯定的存在になりうるとして、これが彼らとの付き合いのスキルと考えられた。

第3章以降より、質的調査で日本人のブラジル適応における具体的な困難とその対処を検討した結果、いずれも社会生活面の困難として、治安・安全に関わる困難が大きいと考えられた。滞在目的や滞在年数の長短に関わらず、ほぼ全員が治安・安全面の困難を語り、そして詳細な行動的認知的対処を行っていた。ブラジルでは、買い物や挨拶の仕方など日々の生活に役に立つスキルより、まず自分の身を守り安全に暮らすためのサバイバルスキルが必要と考えられた。ブラジルの社会と文化への注目も、在伯日本人を対象者とした心理学研究も非常に少ないため、本稿の研究は文化特異的な情報的価値に加えて、異文化圏での社会生活と対人関係の両面にわたるスキル研究の先行例としての意味があると考えられる。

第2節 本研究の限界と今後の課題

本研究における知見は前節で述べたとおりである。しかし、本研究は在伯日本人における異文化適応の初期的な探索的研究であり、以下のような研究の限界や、課題がある。

量的調査に関しては、第2章の考察において、エスニック性の高さの主要因の検証が今後の課題であると述べた。そのため今後は、ブラジルの他地域において、質問紙の回収方法に配慮した調査を実施する必要がある。本調査はブラジルのX市在住116名の日本人の調査結果であり、ブラジル全土の日本人を代表していない。今後はより大きなサンプルで、調査地や年齢、将来の計画、居住期間などの統制を行ったうえで調査を行い、ブラジルにおける日本人の文化的変容の態度と精神的健康に関わるそれぞれの影響の大きさについての検討が望まれる。特に年齢、社会的背景の違いによっても調査されるべきであろう。滞在者の考え方や態度は、時間の経過とともに変化し続けることを前提とした場合、ニューカマー日本人と、在伯数十年にわたる日本人移民とをカテゴリーとして比較検討していくところが理想的と考える。

第3章以降の質的調査における、研究の限界と今後の課題は以下の通りである。まず、第3章の留学生における調査、第4、5章のブラジルX市に滞在する日本人15人または19人における調査の結果も、それはそのまま一般化、普遍化されるものではない。ブラジル全土の在伯日本人を代表しておらず、今回の調査対象者から得られた限定的な知見に過ぎない。今後は、量的調査と同様に他の都市の環境での検討を必要とする。性別や滞在目的、帰国予定の有無などの属性が、どう影響するのかはつかめていない。今後は対象を広げて検討していく必要がある。また、適応は過程性的変化という観点からは、時期的変化を捉える必要が指摘される。

日系人との関係性に関しては、アメリカなど、他の国に住む日本人と日系人との関係にも当てはまるのか、ブラジル以外の日系社会と今回の初期的検討を比較し、地域性と普遍性を弁別する観点も必要であろう。また今回は、日系人との関わりについて別章で論じたが、本来日系人との付き合いも、その他のホストや同胞と同じ社会生活環境の中で生じている。今後は日系人を含めたブラジルにおける対人関係を総合的に検討していくと良いと考える。

最後に、心がけや振る舞い方といった認知行動的スキルの基本的な要素は見えてきたが、それを基にした教育用スキルシートなどを具体化して学生や社会人らに教育実践を行うこと、そしてその教育効果の検証をすることが求められるだろう。学習を繰り返し行なうことでスキルの精選を計る事が、次の課題ともなる。今後も調査を継続し、実践に向けた研究蓄積が望まれる。

引用文献

- Adler, P.S.(1975). The transitional experience: An alternative view of culture shock. *Journal of Humanistic Psychology*, 15(4)13-23.
- Berry, J.W.(1997). Immigration, Acculturation, and Adaptation. *applied Psychology: An International Review*, 46 (1), 5-68.
- Berry, J.W.(2005). Acculturation: Living successfully in two cultures. *International Journal of Intercultural Relations*,29, 697-712..
- Berry, J. W., Sabatier, C.(2010). Acculturation, discrimination, and adaptation among second generation immigrant youth in Montreal and Paris. *International Journal of Intercultural Relations*, 34, 191-207.
- Brian, J. E.(2012). Preparing Japanese University Students for study abroad, 多摩大学グローバルスタディーズ学部紀要 4,11-27
- 出口 真紀子 (2010). アメリカに移住した日本人女性の文化変容の語り 女性学評論, 24, 43-73
- Demes, K. A., & Geeraert, N.(2014). Measures matter: Scales for adaptation, cultural distance, and acculturation orientation revisited. *Journal of Cross-Cultural Psychology*,45(1) ,91-109.
- Dinesh, B., & Oyedeji, A.(2004).Depression in immigrant and ethnic minorities. *Advances in Psychiatric Treatment*, 10, 13-17.
- Furnham, A., & Bochner, S.(1986).*Culture shock: psychological reactions to unfamiliar environments*. London:Methuen & Co.Ltd.
- 海外日系人協会(2017).海外日系人数 <http://www.jadesas.or.jp/aboutnikkei/index.html> (2018年10月11日)
- 外務省(2018).ブラジル基礎データ <http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/brazil/data.html> (2018年11月24日)
- 外務省海外安全ホームページ(2018a).南米地域海外安全情報 Retrieved from http://www.anzen.mofa.go.jp/info/pcareahazardinfo_21.html (2018年8月12日)
- 外務省海外安全ホームページ(2018b).海外邦人援護統計 2010年版～2016年 Retrieved from http://www.anzen.mofa.go.jp/anzen_info/support.html (2018年8月12日)
- 外務省領事局政策課(2018). 海外在留邦人数調査統計 平成30年要約版 Retrieved from <http://www.mofa.go.jp/mofaj/files/0003683.pdf> (2018年8月12日)
- 稲村 博(1980).日本人の海外不適応 日本放送出版協会
- Jeffery Lesser (2016).ブラジルのアジア・中東系移民と国民性の構築 鈴木茂,佐々木剛二(編)明石書店
- Jang, Y., Kim, G., Chiriboga, D., & King-Kallimanis, B. (2007). A bidimensional model of acculturation for Korean American older adults. *Journal of aging Studies*, 21, 267-275.

- 海外日系人協会(2017).「日系人について知ろう」<http://www.jadesas.or.jp/aboutnikkei/> (2017年9月24日)
- 加藤 恵理(2016).ハワイ日系人の歴史, 山崎恵一,やまだようこ,山崎昌子,池田佳子,小林亜子(編著),日本人と日系人の物語, 世織書房 pp30-31
- 小島 奈々恵・深田 博巳(2009).日本人短期留学生の適応過程に関する縦断的研究-留学前の母国適応,留学中のホスト国適応,留学後の母国再適応-.留学生教育, 第14号,pp39-47
- 木下 康仁(2007).ライブ講義 M-GTA 実践的質的研究法修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて 弘文堂
- 李 正姫(2013). 在日コリアンにおける二文化への態度とメンタルヘルス 岡山大学大学院社会文化科学研究科博士学位論文(未公刊)岡山
- 李 正姫・田中 共子(2017).在日コリアンメンタルヘルスに影響する要因の検討 ——認知面と行動面から—— 応用心理学研究42(3),265-266
- Lysgaard, S. (1955). Adjustment in a foreign society: Norwegian Fulbright grantees visiting the United States. *International Social Science Bulletin*, 7, pp.45-51.
- 前山 隆(2001). 異文化接触とアイデンティティ——ブラジル社会と日系人—— 御茶の水書房
- 文部科学省(2018). 日本人の海外留学者数「日本人の海外留学状況」 Retrieved from http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/1345878.htm (2018年3月4日)
- 森 幸一(2008). 目で見えるブラジル日本人移民の百年 ブラジル日本人移民資料館・ブラジル日本移民百周年記念協会百年史編集委員会編 風響社
- 日本移民学会(編)(2018). 日本人と海外移住 移民の歴史・現状・展望 明石書店
- 日本健康心理学会(編)(2002). 健康心理学概論 健康心理学基礎シリーズ① ストレスと健康 実務教育出版
- Oberg, K.(1960). Culture shock: Adjustment to new cultural environments. *Practical Anthropology*, 7, 177-182.
- 大西 守(1992).異文化ストレス症候群 バベル・プレス
- 大谷 尚(2011). SCAT: Steps for Coding and Theorization ——明示的手続きで着手しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析手法—— 感性工学 10(3),155-160
- Ozeki, N., & Mizuguchi, M.(2007). Japanese mothers living in New York with young children: Transcultural and child rearing stress factors and mental health. 女性心身医学,12, 506-518.
- Pedersen, P.(1995). *The five stages of culture shock: Critical incidents around the world. Contributions in psychology*. Number25. Westport, CT:Greenwood press.
- Sabet, Mehran.(2009).アメリカの日本人留学生：新しい環境に適合できましたか？ 聖学院大学論叢 22(1),45-69
- 斉藤 広志(1984).ブラジルと日本人 サイマル出版会

- 迫 こゆり(2015).在伯日本人の異文化適応に関する探索的検討—文化受容と不適応症状及び適応促進要因を中心に,岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要,40,125-144.
- Sam, D.L., & Berry, J.W.(1995).Acculturative stress among young immigrants in Norway. *Scandinavian Journal of Psychology*, 36, 10-24.
- Sam, K., Denise, R., Mari, J. J., & Shirakawa, I., (2009). The mental health of Korean immigrants in Sao Paulo, Brazil. *Cadernos de Saude Publica*, 2(4), 819-826.
- Shibuya, Y.(2000). Examination of the contact hypothesis: Intercultural attitudes among Japanese company-wives in England. *社会心理学研究*,15(3),200-211.
- 志賀 恭子(2014). ニューヨークにおける日本人女性の移民と文化変容 移民研究年報, 20, 39-58
- Silva, R, T., Neto, F, L., & Skokauskas, N.(2013). Child and adolescent refugee mental health in Brazil : Literature review and family case report. *Adolecent Psychiatry*, 3, 46-51.
- 鈴木 満(2012). 異国でこころを病んだとき —在外メンタルヘルスの現場から— 弘文堂
- 高濱 愛・田中 共子(2009).アメリカ留学準備のためのソーシャルスキル学習セッションの試み — 対人関係の形成に焦点を当てて — 留学生教育 14, 31-37
- 竹下 修子(2001). 台湾における日本人妻の社会的ネットワーク—国際結婚による移住のためのネットワーク変容の視点から—愛知学院大学教養部紀要,49, 87-99
- 田村 梨花・三田 千代子・拝野 寿美子・渡会 環(編)(2017). ブラジルの人と社会 上智大学出版
- 棚原 健次(1980). 移民に関する心理学的研究—ブラジルにおける沖縄移民を中心にして— 沖縄国際大学文学部紀要.社会学科篇,7,19-61.
- 田中 共子(2000). 留学生のソーシャルネットワークとソーシャルスキル ナカニシヤ出版
- 田中 共子(2010). 異文化適応とソーシャルスキル 日本語教育 146,61-75.
- Ting-Toomey,S.,& Hotta,J.(2013).Intercultural adjustment and friendship dialectics in international students: A qualitative study. *International Journal of Intercultural Relations*, 37, 550-566
- Ting-toomey, S., Yee-jung, K. K., Shapiro, R. B., Garcia, W., Wright, T. J., Oetzel, J. G., (2000). Ethnic/cultural identity salience and conflict styles in four US ethnic groups *International journal of International Relations*, 24, 47-81
- 角川 雅樹(1993). ラテンアメリカにおける日系人の心理 —とくに、アイでティティの視点から— 東海大学紀要 教育研究所 1 47-57
- Ward, C., Kennedy, A.(1994). Acculturation strategies, psychological adjustment, and sociocultural competence during cross-cultural transitions , *Int. J. Intercultural rel.*, Vol.18, No.3, pp.329-343

- Ward, C., Rana-Deuba, A.(1999). Acculturation and Adaptation Revisited *Journal of cross – cultural psychology*, 30(4), 422-442
- Ward, C., Bochner, S., & Furnham, A.(2005). *The psychology of culture shock*. Brighton:Taylor & Francis e-Library, Routledge.
- 叶 尤奇(2015).日本人海外駐在員妻のパーソナル・ネットワークに関する一考察 —上海在住の日本人海外駐在員妻の事例を基に—*多文化関係学*,12,71-88.
- 在 X 市日本国総領事館(2015).「X 市案内」
<http://www.curitiba.br.emb-japan.go.jp/guide/curitiba-201505.pdf>(2017年4月24日)

10) ブラジル人の親友がいる	1・2・3・4・5
11) 日本人・日系ブラジル人と付き合う時は、自分らしく自然にふるまえる	1・2・3・4・5
12) ブラジル人と付き合う時は、自分らしく自然にふるまえる	1・2・3・4・5
13) 日本人や日系ブラジル人との集まりに、積極的に参加している	1・2・3・4・5
14) ブラジル人との集まりに、積極的に参加している	1・2・3・4・5
15) 日本人・日系ブラジル人どうしで結婚することに賛成だ	1・2・3・4・5
16) 日本人・日系ブラジル人がブラジル人と結婚することに賛成だ	1・2・3・4・5
17) 自分はやっぱり日本人だと感じる	1・2・3・4・5
18) 自分はブラジル人とほとんど変わらないと感じる	1・2・3・4・5
19) 日本の国籍を守り続けるのは、いいことだと思う	1・2・3・4・5
20) ブラジルに住んでいるので、ブラジル国籍になってもいいと思う	1・2・3・4・5
21) 周囲の人に、自分は日本で生まれ育った日本人だと伝えている	1・2・3・4・5
22) 周りから見れば、私はブラジル生まれの日系人と区別がつかないと思う	1・2・3・4・5
23) 日本風の生活習慣を守って暮らしている	1・2・3・4・5
24) ブラジルの生活習慣になじんで暮らしている	1・2・3・4・5
25) 日本の祝日や記念日を祝っている	1・2・3・4・5
26) ブラジルの祝日や記念日を祝っている	1・2・3・4・5
27) 私の人生は、かなり、みじめである	1・2・3・4・5
28) 時々、人生は生きる価値がないものと思うことがある	1・2・3・4・5
29) 何の理由もなく悲しくなることがよくある	1・2・3・4・5
30) 時々、すべてに希望がないように思われ、何もやりたくない気分になる	1・2・3・4・5
31) 楽しみや期待していることが何もない	1・2・3・4・5
32) 理由も分からずゆううつになる（落ちこむ）ことがよくある	1・2・3・4・5
33) 時々ゆううつになり（落ちこんで）一日中ふとんに入っていたい気分になる	1・2・3・4・5

ご協力ありがとうございました。